

修羅の道 を 進む

防衛大学校の学生は国の宝です。我が国の独立と安全に^{つら}連なる目標系列に^あ在る諸君の^{ほとん}殆どは^{いづ}何れ指揮官に^な成ります。その時、^{いのち}命の^や遣り取りという最終局面に^{そうぐう}遭遇する可能性があるのが自衛官です。国防の^{こころざし}「志」に燃えて入校した人も、国防の^{こころざし}「志」にさほど燃えないで入校した人も、「自分は、死ぬのが怖いので、戦場において部下を^う上手く^ま指揮する事が出来るんだらうか？」等々といずれ悩む事になります。そういう悩みは、古今東西の士官候補生の共通問題であり、貴方だけの悩みではありません。“最悪の事態に至った際どのように振る舞えば良いのか”について入校当初に知れば、^{あと}後は^{しせい}気が楽になります。そこで死生観に関する私の講話は、諸君の学生生活には役立たず、^{いのち}命の^や遣り取りという最終局面に役立つ話ですので、諸君が^{にんかん}任官した^{のち}後に最悪の事態に至った場合に思い出して^{もら}貰えれば^{さいわ}幸いです。諸君が、^{たんりよくれんせい}胆力錬成・^{きりようかくじゅう}器量拡充・^{じんかくとうや}人格陶冶の連続修養によって3佐になる頃までに、十分理解すれば^{よろ}宜しいのです。

1 8 . 4 . 1 0

防衛大学校第 1 3 期生
牧 本 信 近

目 次

自己紹介		1 頁
はじめに		2
第 1 章	修羅の道	14
第 2 章	名将に学ぶ	16
1	カルタゴの名将ハンニバルの言葉	16
2	英国提督ネルソンの自己同期形成	17
3	フランス皇帝ナポレオンの思索炯眼	18
4	米国将軍パットンのリーダーシップ解説	18
5	朝鮮戦争の英雄白善燁将軍語録	19
6	米国陸軍中佐ハロルド G ムーアの出征に際し訓示	24
第 3 章	峠からの指揮官像	25
第 4 章	艦長の必要条件	28
1	指揮統率力	28
2	運航能力	30
3	戦術能力	30
4	戦争以外の軍事作戦（M O O T W）有効遂行能力	31
5	国際法・国内法・R O E の精通活用能力	31
6	渉外能力	31
7	管理能力	32
8	先輩の教え	33
第 5 章	其の他	37
第 1 節	指揮官道	37
第 2 節	強い指揮官	43
第 3 節	幕僚は考え指揮官は感じる	45
第 4 節	規律厳正・遵法精神の原点	49
第 5 節	人間教育	52
第 6 節	武人の頭と足に戻ろう	54
第 7 節	部隊運用の要諦	57
第 8 節	インド洋方面派遣部隊視察	68
第 9 節	定期昇任者に対し訓示	72
おわりに		74

自 己 紹 介

御紹介いただいた防大１３期生の一番目の講師、^{まきもとのぶちか}牧本信近です。海・空・陸の順番で講話します。奇しくも講話の順番は、我が国を防衛する際、我が国の領域から最も離れた海域で戦う海上自衛隊、次に離れた防空識別圏の中で戦う航空自衛隊、我が国の領土の中で戦う陸上自衛隊、の順番です。

初めに、私の略歴を述べます。

１９４６年（昭和２１年）熊本市で生まれ、熊本県立熊本高等学校を経て、防衛大学校に１９６５年（昭和４０年）４月第１３期生として入校し、１９６９年３月に卒業しました。そして、海上自衛隊幹部候補生学校（*at* 江田島）一般課程を経て、練習艦隊の実習幹部として世界一周の遠洋航海に参加しました。

最初の配置として護衛艦あきづき^{ほうじゅつし}砲術士〔３等海尉〕を振り出しに、多くの幕僚勤務^{のち}の後、指揮官配置としては、護衛艦まきぐも艦長〔２等海佐〕、護衛艦３隻を有する第４７護衛隊司令〔１等海佐〕、３個護衛隊・護衛艦８隻を有する第２護衛隊群司令〔海将補〕、大湊地方総監〔海将〕及び幹部学校長〔海将〕を歴任しました。２３番目の配置として第３８代自衛艦隊司令官〔海将〕兼（テロ対策特別措置法に基づく）インド洋方面派遣部隊指揮官を１７ヶ月余に^{わた}亘り^{まっ}全うし、２００４年８月に退官して２１回目の引越しで自宅に帰りました。

自衛艦隊（*Self-Defense Fleet*）は、１９５４年（昭和２９年）７月１日に創設され、自衛艦隊司令部、護衛艦隊、第１輸送隊、掃海隊群、潜水艦隊、航空集団、情報業務群、海洋業務群、特別警備隊及び開発隊群で編成されており、総計として、兵員約２４０００名（海上自衛隊約５万名）・艦艇約９０隻３０万トン（*17.3.31* 海上自衛隊自衛艦１５２隻４２．６万トン・支援船２８２隻２．５万トン）・航空機約２００機（海上自衛隊航空機約３００機）・車輛約９００台^{よう}を擁する機動海上作戦部隊です。自衛艦隊の^{おふね}御艦と飛行機の値段総計は約５兆円です。「国民の皆様から御預かりした艦艇・航空機・車輛を、部下兵員をして効果的に運用させることにより、我が国の平和の維持と国民の生命財産の保護のみならず、国際社会の安定確保・平和維持の一翼^{ささ}を支え、我が国の国益と国家の大事^{こと}に^{こた}える」ことが、自衛艦隊司令官（*Commander IN Chief, Self-Defense Fleet*）の仕事です。有事には、横須賀・呉・佐世保・舞鶴・大湊の五個地方隊や補給本部など、海上自衛隊の^{ほとん}殆どの部隊が管理編成から任務編成へと移行して海上作戦部隊（*MOF*）に編入され、自衛艦隊司令官が海上作戦部隊指揮官（*CMO F*）と為って一元指揮^とを執ります。

私は、自衛艦隊司令官を56歳から58歳まで務め、現在は、ユニバーサル造船株式会社に特別顧問として勤務しています。因みに、聯合艦隊司令長官を、東郷平八郎元帥は56歳から58歳まで務めて87歳で亡くなられ、山本五十六元帥は55歳から59歳まで務めて戦死されました。

即ち、私は、敵を殺さず、部下を訓練で死なしたけど、本人は事故死・病死せず、懲戒免職にもならず、セクハラで訴えられもせず、妻の内助の功により、大いに武運長久に恵まれて、恙無く定年退官を迎えたと言う事です。

は じ め に

我々13期生が在学した1960年代の日本は、共産革命前夜の状況であり、ソ連の間接侵略に伴う自衛隊の治安出動という予感がありました。当時は、世界同時革命を叫ぶ学生運動が盛んであり、東京都内だけでも55の大学がバリケード封鎖されていました。日曜日に外出して東京に行きますと、全学連と書いたヘルメットを被り覆面をしてゲバ棒を持った学生が、大勢で都電の敷石を外して叩き割り警察機動隊に投げる石や火炎瓶を作っているのをよく見かけました。昼日中、日本国の首都で斯かる無法が罷り通っていたのです。1969年1月18日から19日、東京大学の安田講堂に立て籠った全学連(633人)と警察機動隊(8500人)との二日間に亘る攻防もありました。そして、我々13期生が任官した1970年代の世界は、ソ連軍の脅威が高まり、第3次世界大戦の予感がありました。よって、漠然と「50歳までに戦死するんじゃないか」と思っていました。ところが、敵を殺さず私も死なず定年退官を迎えることが出来ました。しかし、自衛隊の重点が防衛力整備から防衛力運用に変貌し、防衛力運用が本格化する時代に任官する諸君は違うかもしれませんヨ。

防衛大学の学生は国の宝です。我が国の独立と安全に連なる目標系列に在る諸君の殆どは何れ指揮官に成ります。その時、命の遣り取りという最終局面に遭遇する可能性があるのが自衛官です。国防の志に燃えて入校した人も、国防の志にさほど燃えないで入校した人も、「自分は、死ぬのが怖いので、戦場において部下を上手く指揮する事が出来るんだらうか？」等々といずれ悩む事になります。そういう悩みは、古今東西の士官候補生の共通問題であり、貴方だけの悩みではありません。“最悪の事態に至った際どのように振る舞えば良いのか”について入校当初に知れば、後は気が楽になります。そこで死生観

に関する私の講話は、諸君の学生生活には役立たず、命の遣り取りという最終局面に役立つ話ですので、諸君が任官した後に最悪の事態に至った場合に思い出して貰えれば幸いです。諸君が、胆力錬成・器量拡充・人格陶冶の連続修養によって3佐になる頃までに、十分理解すれば宜しいのです。

1 修羅の道

奈良市にある興福寺の阿修羅像を観る時、深い憂愁に沈む少女に見えるのは、私だけでしょうか。その愁いには、限り無き悲しみ・怒り・寂しさがあ
ります。

仏教では、阿修羅は、仏の眷属であり、仏法を守護する八部衆〔天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅迦〕の一部です。

阿修羅の住む修羅道とは、六道〔地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道〕の一つで、争いや怒りの絶えない世界です。戦では、吾が行く手を遮る者あらば、友に会うては友を殺し、君に会うては君を殺し、父に会うては父を殺す。これは修羅の道です。

戦場における指揮官は、部下・味方が死ぬか又は相手・敵が死ぬかの場合、一般に相手・敵が死ぬ方を選びます。どちらを選択しようが、人倫に悖る修羅の道です。つまり、指揮官は、平時には人倫の道を歩めども、有事に遇っては正気と生気を保ちつつ阿修羅王の如く狂と猛との修羅の道を進まざるを得ない時もあるでしょう。そして、平時に返れば、正気と生気により速やかに人倫の道に戻るのは当然です。

死ぬ事に覚悟はいりません。死ぬ時は「まッあ、いいかあ！」と死ねばよい。覚悟が有る人も無い人も、人は皆いつか死にます。まして戦場においては、覚悟が有る者も無い者も、弾丸が当たれば平等に死にます。（男には命中するけど女には命中しない弾丸は存在しません。だから自衛隊では男女平等なのです。）即ち、死ぬ（殺される）覚悟がなくとも相手がきちんと方を付けてくれます。しかし、米国陸軍ジョージ S. パットン Jr. 将軍が第二次世界大戦の欧州戦線で「米国の為に死ぬ事が諸君の仕事ではない。諸君の仕事は奴等をドイツの為に死なせてやる事だ。」と訓示したように、相手を害する（殺す／傷つける）事には特別の覚悟がいりますぞ！

有事に遇っては修羅の道を進まざるを得ない時もある指揮官は、戦場に在っては阿修羅王となりて三面六臂の活躍を為し、任務を完遂して味方の勝利

に貢献すべきです。マキアヴェッリ [1469－1527] ^{いわ}曰く「天国に行く最も有効な方法は地獄へ行く道を熟知することである」と。^{きょうじんふとう}強靱不撓の精神と堅忍不拔の勇気と^{けんになふぼつ}拔山蓋世の気力を有する強い指揮官でなければ、兜率天で修行中の^{みろくぼさつ}弥勒菩薩が^{ぼつざんがいせい}釈迦牟尼世尊 [ゴータマ・シッダルダ [BC565－BC484] 印度ヒマラヤ南麓の^{しゃかぞく}釈迦族の王子として4月8日誕生し、12月8日35歳で^{じょうどう}成道し、2月15日80歳で涅槃に入る]の涅槃後五十六億七千万年の後に正覚により^{しょうがく}成仏得道して三千大千世界 [一仏陀が^{じょうぶつとくどう}司る世界＝六道世界の千(小千)×千(中千)×千(大千)の集合世界／三千世界とも言う]の人々を救済するまで、自分自身が^{しゅら}修羅の道を進んで地獄へ^お堕ち責め苦を受け続けるというような、悲壮な^{かくご}覚悟に堪えられないでしょう！

地獄へ^お堕ちても五十六億七千万年後には必ず^{すく}救われます。地獄へ^{えいごう}永劫堕ちつ^{ばな}放しでないので希望が有ります。諸君、安心して国防に^{いのち}命を懸けて下さい。

2 護衛艦あきづき砲術士 [第1番目の配置 3尉 at 横須賀]

我々防大13期生の海上要員は、1970年3月26日江田島の幹部候補生学校を卒業し、練習艦隊司令部付き実習幹部に発令されました。練習艦隊の日本一周巡航の際、東京で遠洋練習航海部隊の壮行会がありました。この壮行会では、大東亜戦争開戦時の^{とうじょう}東条内閣の海軍大臣^{しまだしげたろう}嶋田繁太郎 [1883－1976] 大将、真珠湾攻撃時の第一航空艦隊司令部参謀長^{くさかりゅうのすけ}草鹿龍之介 [1892－1971] 少将、真珠湾攻撃時の第一航空艦隊司令部航空甲参謀^{げんだみのる}源田実 [1904－1989] 中佐、空母「赤城」飛行隊長兼真珠湾攻撃飛行機隊総指揮官^{ふちだみつお}淵田美津雄 [1902－1976] 中佐などの大先輩と御会いして御話を^{うかが}伺うという貴重な機会がありました。そして、1970年6月30日1600i東京港晴海岸壁を出港して140日34000海里の東周り世界一周遠洋練習航海に向かい、ミッドウェー(米)・サンディエゴ(米)・バルボア(パナマ)・ノフォーク(米)・ポーツマス(イギリス)・キール(ドイツ)・アムステルダム(オランダ)・アントワープ(ベルギー)・ブレスト(フランス)・ダカル(セネガル)・ロレンソマルケス(ポルトガル領モザンビーク)・モンバサ(ケニア)・コロombo(セイロン)に寄港して、更にシーマンシップを体得し、同年11月18日0922i横須賀港に帰投しました。その後、1970年11月21日同期生たる実習幹部は日本各地の^{おのおの}各々の部隊・学校へと別れました。

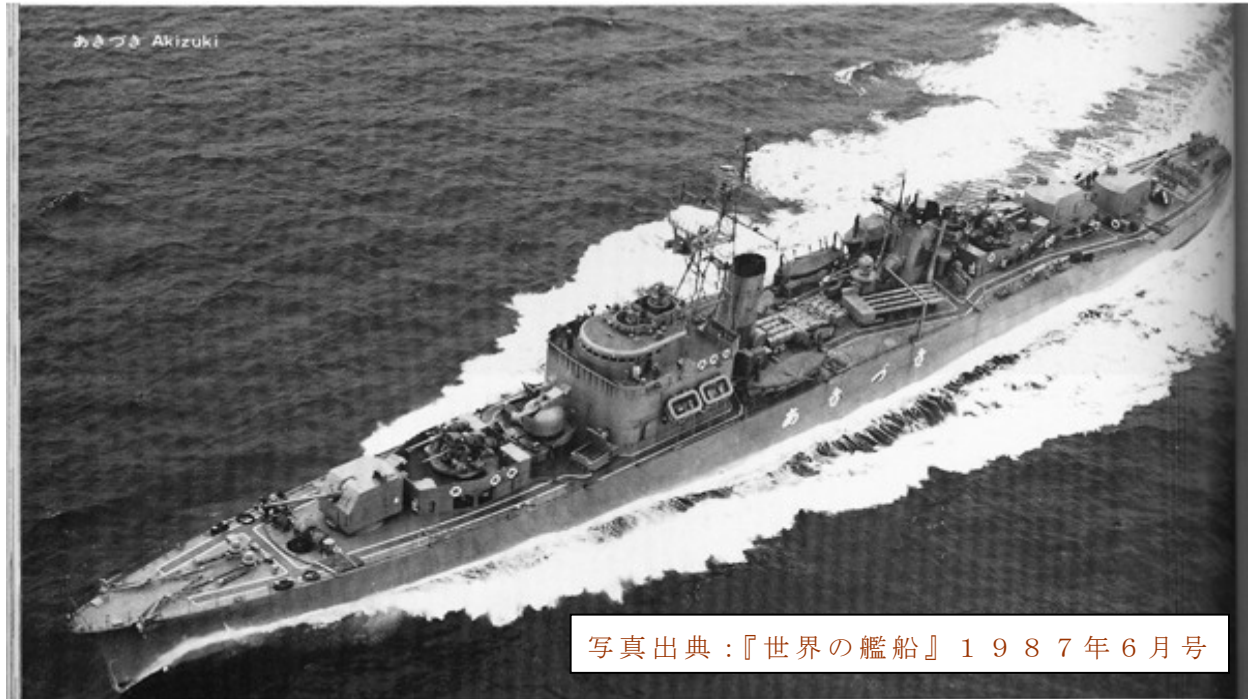
初めて^{いただ}戴いた私の配置は護衛艦あきづき砲術士 [1970.11～1971.12] 兼第

1 分隊士兼甲板士官^{かんぱん}です。第 1 術科学校幹部任務射撃課程 (1970. 12. 3－1971. 1. 14) で約 1 ヶ月余り砲術の教育を受けました。「あきづき」は、基準排水量^{トン} 2 3 5 0 t・乗組員 3 3 0 名の護衛艦で、護衛艦隊司令官が直率^{ちよくそつ}される護衛艦隊の旗艦^{きかん}でした。母港は横須賀です。攻撃武器の大砲・魚雷^{ぎょらい}・爆雷^{ばくらい}及び運用(甲板作業)を所掌する「あきづき」砲雷科の定員は幹部 4 名と海曹・海士約 1 5 0 名です。幹部は 3 佐の砲雷長・1 尉の水雷長・3 尉の砲術士・3 尉の水雷士でした。砲雷科の科長が砲雷長です。砲雷長は大砲・射撃指揮装置と運用(甲板作業)の海曹・海士の計 1 2 5 名の第 1 分隊長でもあります。第 1 分隊士は砲術士です。(水雷長はソナーと魚雷^{ぎょらい}・爆雷^{ばくらい}の海曹・海士の計 2 5 名の第 2 分隊長でもあります。) 大砲は 5 吋^{インチたんそう}単装高角砲 3 基(3 門)と 3 吋^{インチれんそう}連装速射砲 2 基(4 門)を装備していました。主砲は口径 1 2 7 mm の 5 吋^{インチたんそう}単装高角砲〔弾丸重量 3 2 Kg、(人力装填^{そうてん})発射速度 1 5 発／分／門、最大射程 2 5 0 0 0 yds^{ヤード}(2 2 8 6 0 m)、総重量 3 5 t^{トン}〕で、副砲は口径 7 6 mm の 3 吋^{インチれんそう}連装速射砲〔弾丸重量 5.9Kg、(人力装填^{そうてん})発射速度 4 5 発／分／門、最大射程 1 4 0 0 0 yds^{ヤード}(1 2 8 0 2 m)、総重量 1 7.0 t^{トン}〕です。副砲 2 基をそれぞれ # 3 1 砲・# 3 2 砲と呼びます。副砲の各砲台に砲台長以下 1 5 名が配員され、副砲の各弾薬庫に弾庫長以下 1 0 名が配員されていしました。副砲の射撃指揮装置は Gun Fire Control System M k 6 3^{マーク}でした。副砲の射撃指揮所は、艦橋^{ブリッジ}の上に在り、1 曹の射撃管制員長以下 7 名が配員されていしました。副砲関係の海曹・海士の定員は 6 2 名であり、砲術士が副砲射撃指揮官^{ふくほう}です。因みに、主砲射撃指揮官は砲雷長です。

DD (Destroyer) 1 6 1 あきづき

建造所；三菱重工(株)長崎造船所	艦種；護衛艦
起工 ^{きこう} ；1 9 5 8. 7. 3 1	進水 ^{しんすい} ；1 9 5 9. 6. 2 6
就役 ^{しゅうえき} ；1 9 6 0. 2. 1 3	除籍 ^{じょせき} ；1 9 9 3. 1 2. 7
基準排水量 ^{はいすいりょう} 2 3 5 0 t ^{トン}	乗組員 ^{のりくみいん} ；3 3 0 名
全長 1 1 8.0m×全幅 1 2.0m×深さ 8.5m	吃水 ^{きつすい} 4.0m
主機(メンエンジン)；蒸気タービン機関×2 基	燃料；A 重油 ^{じゅうゆ}
機関出力；4 5 0 0 0 馬力	最大速力 ^{ノット} ；3 2.0 kt (5 9.3Km/h)
スクルー軸数；2 軸	舵数；2 枚
武 装；主砲射撃指揮装置 ^{しゅほう} M k 5 7 × 2 基 ^{マーク}	
主砲 5 吋 ^{しゅほう} 5 4 口径 ^{インチ} 単装 ^{たんそう} 高角砲 ^{マーク} M k 3 9 × 3 基(3 門)	

^{ふくほう}副砲射撃指揮装置^{マーク}Mk 6 3 × 1 基
^{ふくほう}副砲^{インチレンそう}3 吋連装速射砲^{マーク}Mk 3 3 × 2 基(4 門)
^{たいかん}対艦長魚雷^{よんれんそう}四連装発射管 × 1 基
^{たいせん}対潜短魚雷^{らくしゃき}落射機 × 2 基
^{マーク}Mk 1 0 8^{たいせん}対潜ロケット発射機 × 1 基
^{ばくらい}爆雷発射機 × 2 基
^{マーク}Mk 1 5^{きじょう}ヘッジホッグ × 2 基
^{ばくらい}爆雷投下軌条 × 2 条



写真出典：『世界の艦船』1987年6月号



「あきづき」の兵器等の配置は、前から、^{いかり}錨甲板・**# 5 1**・**# 3 1**・^{マーク}Mk
 1 0 8^{たいせん}対潜ロケット発射機・^{マーク}Mk 1 5^{ブリッジ}ヘッジホッグ 2 基・^{ブリッジ}艦橋・^{ブリッジ}艦橋上部の
^{ふくほう}副砲射撃指揮装置・^{ブリッジ}艦橋上部の**# 1**^{しゅほう}主砲射撃指揮装置・**# 1**マスト・**# 1**煙
 突・^{たいかん}対艦長魚雷^{よんれんそう}四連装発射管・**# 2**マスト・**# 2**煙突・^{たいせん}対潜短魚雷^{らくしゃき}落射機 2
 基・**# 2**^{しゅほう}主砲射撃指揮装置・**# 3 2**・**# 5 2**・**# 5 3**・^{ばくらい}爆雷発射機 2 基・^{ばくらい}爆雷
 投下軌条^{きじょう} 2 条です。

(1) 任務に対する責任感を行動で示せ ←あきづき # 3 1 砲台に不発弾

1971年5月13日、護衛艦「あきづき」が対空スリーブ訓練射撃を大島南東方の訓練海面で実施しました。アメリカの航空母艦に搭載していた中型対潜哨戒機を改造して吹流しを空中に曳いてターゲットサービスを遣るプロペラ機をS-2F(U)と言います。このプロペラ機が160kt(296Km/h)で飛行しながら7000ft(2134m)のワイヤーで曳航する頭径15インチ(38.1cm)・尾径31インチ(78.7cm)・全長20ft(6.1m)の吹流しをスリーブと言います。このスリーブを的にして護衛艦の大砲で狙って撃つ訓練を対空スリーブ訓練射撃と言います。

あきづき艦長の号令「第2戦速(21kt=38km/h)」「対空戦闘、90度・高角10度、突っ込んで来るスリーブ」～あきづき砲術士の号令「対空戦闘、90度・高角10度、突っ込んで来るスリーブ、連測射法、方位盤光学照準、独立打方独立発射、発射弾数各門10発」～副砲方位盤射手・各砲台長の報告「方位盤、目標よし～#31砲/#32砲、砲向よし」～あきづき砲術士の報告「副砲、目標よし・砲向よし」～あきづき艦長の号令「砲撃始め」～あきづき砲術士の号令「打方始め」と、対空スリーブ訓練射撃が開始されます。

副砲各砲台長の報告「#31砲/#32砲、打終り」を受けて、私は号令「打方待て」を令します。しかし、副砲各砲台長の報告「#31砲/#32砲、砲中弾なし」を受けても、発射弾数を発射音で数えていたので、私は1発不足と感じました。艦橋の上に在る副砲指揮所から前の#31砲台と後の#32砲台を観察すると、#31砲台の左舷内側に捩じれ亀裂から黒い発射薬(火薬)の一部漏出した3吋VTNF弾薬包(11.35Kg)1発が転がっているのを私が発見しました。気が付いた部下は皆凍り付いて私の顔を見詰めています。‘発射薬(火薬)の一部漏れ出た弾薬包が残留熱等で発火したら、人が死ぬ。しかし、こういう時こそ指揮官自らが行動しなければならない。’と即断し、「#31砲台員は退避せよ！」と下令して#31砲台に駆けつけ、亀裂した弾薬包を自分の手で海中投棄しました。その間は1分間も有りませんでした。私は凄く長い時間に感じました。

「危急存亡の時、部下は指揮官の顔を見詰める。其の時、指揮官は任務に対する良心から生れる責任感を行動によって示さねばならない。即ち指揮官は、マキアヴェッリ [1469-1527] の記した“天国に行く最も有効な

方法は地獄へ行く道を熟知することである”を必至の覚悟と心得て、
胆力錬成・器量拡充・人格陶冶の連続修養を為さねばならない。古来“勇怯
(勇氣と卑怯)の差は小さく、責任感の差は大きい”と言われてきた。ナ
ポレオン [1769-1821]の言う“忠誠と規律”またはクラウゼヴィッツ [1780
-1831]の説く“良心に対する責任から生れる勇氣”から生ずる本当の意
味での責任感こそが戦士の心を衝き動かすのである。職務や任務に対する
良心から生れる責任感を持って生れた性格が教育や訓練によって磨かれ
て確立するものである。勇氣とは、恐れを知らながらも、為すべきことを
為すことである。」と防衛大学で教わった事を、私は思い出したのです。

(2) 窮したら笑え ⇐てるづき #5 3 砲の曳的艦あきづき誤射 3 発

1971年5月27日、護衛艦「あきづき」が大島南東方の訓練海面で
水上標的を曳航して護衛艦「てるづき」の対水上訓練射撃を支援しました。
乙型水上標的とは、全長18.5m・最大幅5.0m・吃水2.4m・排水量3
5.5tの鉄製筏に橙色のビニールシートを張ったマストを六本立てたも
のです。この橙色のビニールシート(全長16.0m×高さ6.0m)を幕的に
して射撃するのです。「あきづき」の艦尾から直径24mm・長さ1100
mのワイヤーで水上標的を8kt(15Km/h)で曳航します。「あきづき」の
右舷側から「てるづき」主砲の5吋単装高角砲3門が射撃します。「あき
づき」後方の水上標的に向かって右側に水柱が揚がると“遠弾”で左側に
水柱が揚がると“近弾”です。何ヤード遠なのか近なのかは、分角を利用
した器具で目測測定します。私は砲術士として、「あきづき」艦尾に陣取
って、「てるづき」の弾着を測定し記録するチームを指揮していました。



てるづき艦長の号令「第3戦速(24kt=43km/h)、取舵、90度宜候」
「戦闘左砲戦、285度、あきづきの曳く標的」～てるづき砲雷長の号令

「戦闘左砲戦、285度、あきづきの曳く標的、全量射法[射撃指揮装置故障時に距離変化を対変距修正量として加減しながら射撃する射法]、砲側(光学)照準、一斉打方発令発射、初弾観測急斉射、斉射間隔6秒、発射弾数各門10発、苗頭503・130(射距離13000 yds=11887 m)」～主砲各砲台長の報告「#51砲／#52砲／#53砲、目標よし～砲向よし～射撃用意よし」～てるづき砲雷長の報告「主砲、砲向よし・射撃用意よし」～てるづき艦長の号令「打方始め」～てるづき砲雷長の号令「打方始め」～主砲射撃員長の発砲管制「発射用意／発砲ブザー：トトト、(放)てー／発砲ブザー：ツー」と、対水上訓練射撃が開始されます。

「あきづき」艦尾の私は7倍双眼鏡で「てるづき」の弾着水柱を観測します。「てるづき」の第一斉射は、遠の弾着水柱2発が見え、残り1発の弾着水柱は極めて離れた大遠です。第二斉射は、近の弾着水柱2発が見えますが、残り1発が見えません。その時、艦橋との電話を被っている伝令が私の後から「砲術士！」と叫びますので、私は振り向きました。すると、「あきづき」右舷正横100 yds(91 m)に30 m程の白い円柱が海の中から立っていました。そして、その白い円柱は上から下へと消えていきました。そのまま海面を見詰めていると、暫くして、「あきづき」右舷正横70 yds(64 m)に青い円柱が急激に伸び始めて30 m程になり、上の方から青色が白色に変わり始め、白い円柱になりました。1905年の日本海海戦を描いた絵の様な様でした。これは「てるづき」の第三斉射であると気が付きました。つまり、「てるづき」主砲三門のうち一門が水上標的でなく「あきづき」を狙っているのです。「てるづき」第一斉射の一発は「あきづき」のマストの上を通過して大遠となり、第二斉射の一発は「あきづき」の近100 yds(91 m)に弾着し、第三斉射の一発は「あきづき」の近70 yds(64 m)に弾着したと言う事です。弾着は段々近付いていますので、次の「てるづき」第四斉射の一発は「あきづき」に命中するでしょう。上甲板に居た「あきづき」乗組員は#52砲と#53砲の左舷など反対側に隠れました。5吋砲弾が命中したら隠れていても無駄です。しかし、危急存亡に直面した人間の心理はそういうものです。私は、「防衛庁共済組合の貯金通帳(残額¥3000)を私の部屋に取りに帰ろうかな！」と思いましたが、「艦が沈没しそうな時、私物を取りに帰った者は艦と一緒に沈んでしまうので、貴重な私物といえども絶対に取りに帰ってはなら

ぬ。」と防衛大学校で教わった事を思い出し、取りに帰るのを止めました。

あきづき艦長(2佐)の「うう、撃つな！と言え。」の指示で、^{ブリッジ}艦橋の無線電話に就いていた水雷士(防大13N)が冷静に「てるづき、射撃を中止されたし。我に弾着が近い。」と無線電話したところ、てるづき艦長が直接了解して「^{うちかた}打方止め」と号令されたので、「てるづき」第四斉射は飛んで来ませんでした。この件で、「あきづき」の船体・武器・機関・人員に異常はなく、「あきづき」の被害は有りませんでした。

後で判ったことですが、水平線付近が^{かす}霞んでいたため、低い位置にある砲台長の^{マーク}Mk 84望遠鏡では水上標的と「あきづき」とを区別し^{にく}難く、「てるづき」の#53が「あきづき」を^{ねら}狙っていたのです。因みに、この日は5月27日であり、日本海海戦を記念した海軍記念日でした。横須賀入港後、「てるづき」の艦長(2佐)・砲雷長(3佐)・砲術士(3尉)が^{そろ}揃って「あきづき」に^{あやま}謝りに来られました。日本酒2升で手打ちに成ったものと記憶しています。

「^{きゆう}窮したら笑え！通常は心／頭／脳が^{からだ}体を支配しているが、^{からだ}体が心／頭／脳に重大影響を及ぼすことがある。それは、^{せつぱ}切羽詰まって^{きゆう}窮した時でも、笑うという^{からだ}体の動きによって^{ほお}頬の血行が良くなり快感が湧き、呪縛された心／頭／脳が解放されることである。そして、心／頭／脳に余裕が生じ、また別の道が拓けてくる。」と防衛大学校で教わった事を、私は後で思い出しました。

(3) パニックに^{おちい}陥った部下を救う為には^{なぐ}殴れ ←P-2V7の^{しゅうよう}遺体収容

1971年7月16日、千葉県の下総^{しもうさ}航空基地を離陸した大型対潜哨戒機P-2V7が松の木に接触して千葉県の^{ちようし}銚子沖に^{ついらく}墜落しました。

中間修理を終えたばかりの護衛艦「あきづき」は、^{いしかわじまはりま}石川島播磨重工業(株)東京第2工場から、^{ついらく}墜落したP-2V7の航空救難に向かいました。銚子沖には護衛艦「あきづき」と掃海艇数隻が集結し、大型対潜哨戒機P-2V7の搭乗員11名と機体を協同搜索します。

航空救難の第一日目(1971.7.16)、私は艇長(3曹)・機関長(士長)・^{パウメン}艇首員(1士)の乗る内火艇の艇指揮です。掃海艇の水中処分員(Explosive Ordnance Disposal)が水深18mの海底で何かを見つけて^{もやい}舳(ロープ)に結び付けると、海面に^{うきこ}浮子が^{あが}揚って来ます。海面に揚って来た浮子の^{うきこ}舳(ロープ)を^{パウメン}艇首員が^{たぐ}手繰ると人の右足が現れました。ギョッとした^{パウメン}艇首員(1

9歳)は舳(ロープ)を放してしまい、ブルブル震えパニックに陥りました。私は直ちに前部へ跳んで行き、艇首員を平手で殴って「確り仕事をしろ！」と怒鳴りました。後にも先にも、部下を殴ったのは初めてです。艇首員は正気に戻り、再び浮子の舳(ロープ)を手繰って右足を揚収しました。続いて、海面に浮子が揚って来ます。艇首員が舳(ロープ)を手繰って骨付き太腿を揚収しました。揚収した遺体の一部を「あきづき」に運ぶと、「あきづき」後甲板には、工作員長の作った祭壇が飾られ、銃を持った衛兵二名が立っていました。こういう揚収作業を日没まで続けました。其の日の「あきづき」夕食は鶏の腿肉でしたが、色調が遺体の骨付き太腿に似ていたので、私は食べる事が出来ませんでした。

航空救難の十日目 (1971. 7. 25)、私は相変わらず内火艇の艇指揮として遺体収容作業に当たっていました。一週間も経つと、死を直視出来る様になります。英霊の遺体または其の一部を見ても触ってもギョッとしません。慣れとは凄い事です。水中処分員(Explosive Ordnance Disposal)が頭・両手・両脚の外れた胴体だけを抱いて浮き揚って来たので、崩れないように溺者救助用鉄網担架に白毛布を敷いて中に乗せ、海面から引揚げました。血で白毛布が真赤に染まったことを鮮明に覚えています。

航空救難の十三日目 (1971. 7. 28)、掃海艇部隊の昼夜を分かたぬ搜索の努力が実って、大型対潜哨戒機 P-2 V 7 の機体が発見されました。

航空救難の十四日目 (1971. 7. 29)、発見された海底の機体を海上に浮かぶ台船に移す事に為りました。あきづき副長(3佐)から「ついでには、潰れた機体に遺体の肉片が挟まっている可能性が高いので、砲術士は其の肉片を回収して来い。」と指示されました。そこで、肉片回収作業隊を編成して雨衣と竹竿を携行させ、内火艇で台船へ向かいました。クレーンで吊下げられた機体が台船上に在りました。台船に上がって雨衣を着用し、潰れた機体を竹竿で叩くと、機体に挟まれていた人体の一部が落下して来ます。殉職された搭乗員 11 名は既に神様ですので、台船上に落ちている其の肉片を素手で拾い集めビニール袋に入れ、「あきづき」に持ち帰って肉片回収作業は完了しました。

この航空救難は 1971 年 7 月 16 日に発動され 7 月 30 日に終結し、「あきづき」は横須賀に帰投しました。無常観に囚われた私は、上官侮辱鼻髭 [1971. 7. 16~1981. 3. 15] を蓄えました。

「パニックに^{おちい}陥った部下は、^{なぐ}殴って^{しょうき}正気に戻さないと、^{あと}後で^{トラウマ}精神的^{じゅんじゅん}外傷になる。但し、十名以上だったら、まず座らせて^{なっとく}諄々と任務の重要性を説いて納得させるべし。」と防衛大学校で教わった事を、私は思い出したのです。

3 練習艦かとり航海士〔第2番目の配置 3尉 at 横須賀〕

次の私の配置は練習艦かとり航海士〔1971.12～1972.12〕兼第2分隊士でした。第1術科学校幹部任務船務課程（1972.1.13－1972.2.23）で約1ヶ月余り船務（戦術・レーダ・通信・航海）の教育を受けました。「かとり」は、基準排水量3350^{トン}t・乗組員295名の練習艦で、練習艦隊の旗艦でした。母港は横須賀です。

（1）砕氷艦「ふじ」乗員の救出準備

1972年春に南極観測支援中の砕氷艦「ふじ」が南極で氷に閉じ込められましたので、ヘリコプタ甲板を有する練習艦「かとり」、航空航法装置TACANを有する護衛艦「ながつき」及び艦船燃料と航空燃料を大量に有する補給艦「はまな」をもって砕氷艦ふじ乗員救出任務隊が編成され、南極へ行く準備が始まりました。かとり副長（2佐）から「ふじ乗員を本艦に総員収容するので「ふじ」は無人に為る。帝國海軍以来、まだ使える^{ふね}艦を無人にした^{ためし}例はない。誰かが「ふじ」に乗り移り「ふじ」を守るべきだ。幸いな事に航海士と機関士B（防大13N）は士官室で最も若くて独身だ。南極に行ったら二人で「ふじ」に乗り移り、一年間「ふじ」を守ってくれ。

「ふじ」には食料も燃料もある。来年、きっと迎えに行くから。」と指示されました。そこで、二人して南極で越冬する準備は何を為すべきか話し合いましたが、^{はつきんかい}白金懐炉しか思い付かず、上陸して^{はつきんかい}白金懐炉を買いました。

^そ其の後、南極で^{あた}温かい風が吹いたため氷が^{ゆる}緩み、「ふじ」は自力で脱出できました。御蔭で防大13Nの二人は^{からふとけん}樺太犬タロ・ジロと同じ運命を^{たど}辿らなくて済みました。

（2）南米方面#16 遠洋練習航海（1972.6.22.1100Y～1972.11.7.0900Y）〔練習艦かとり・護衛艦もちづき〕

↓

12 護衛艦まきぐも艦長〔第12番目の配置 2佐 at 佐世保〕

自分に合った仕事が見つからない若者が増えているそうですが、自分に合った仕事^あが在る若者は^{ほとん}殆ど居ません。^い殆どの若者は、^{ほとん}仕事を自分に合わせ

るのでなく、仕事に自分を合わせなければ成功しません。仕事に自分を合わせて^な為^なりたい自分に^な成^なるように自己変革していく事を、“人間の成長”と言います。そういう人間は、仕事を通じて社会に貢献するので、社会人と呼ばれます。“配置が人を育てる”とも言いますので、安心して下さい。

熊本で惣領^{そうりょう}(長男)の甚六^{じんろく}としてボォーと育った私は、防大1学年の頃、新入生を集めた小隊学生長付き(第3学年)から「いいか！牧本が行動を開始した時は既に遅れているんだ。皆は、牧本が行動を起こすのより先に行動を開始しなければならない。」と御注意されたものです。護衛艦の艦長に合った若者は殆ど居ません。護衛艦の艦長に自分が合っているかどうかを心配する事より、護衛艦の艦長に自分が合うように自己を変革していけば良いのです。学生諸君には、自分の目標に向かって為^なりたい自分に^な成^なるように自己変革していく時間がタツプリ有ります。

21世紀の自衛隊を担^{にな}う諸君は、この小原台の徳育・知育・体育の学習によって脳細胞に知識・見識・胆識^{たんしき}を蓄積して下さい。この日々の精進を卒業後も継続することによって、我が国の平和の維持と国民の生命財産の保護のみならず、国際社会の安定確保・平和維持の一翼^{ささ}を支え、我が国の国益と国家の大事に^{こた}応え得る強い指揮官に^な成^なる事が出来ます。

「おじいさん仮説」の立証

この地球上の人類は、猿人^{えんじん}[アウストラロピテクス；400～100万年前]、原人^{げんじん}[ホモ・エレクトゥス ex. ジャワ原人・北京原人；100～20万年前]、旧人^{きゅうじん}[ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシス ex. ネアンデルタール人；15～3.5万年前]及び新人^{しんじん}[ホモ・サピエンス・サピエンス ex. クロマニヨン人・縄文人・現代人；3.5万年前～]に分類されます。現在は、猿人^{えんじん}・原人^{げんじん}・旧人^{きゅうじん}の子孫が居なくて、新人^{しんじん}の子孫だけが残っています。それは何故か？この答えが「おばあさん仮説」です。それは「ホモ・サピエンス・サピエンスの女性が生殖から解放された後、‘おばあさん’として其の智慧と経験を活かして自分の娘や血縁者の子育てを援助することにより、ホモ・サピエンス・サピエンスの繁殖成功度を上昇させることが出来た。」という仮説です。私もこれに倣^{なら}い、諸君が成^なるであろう自衛隊指揮官の成功度を上昇させるべく、私の経験を伝えました。「おじいさん仮説」を立証するのは諸君です。学生諸君の発奮^{はつぶん}を期待して、私の講話を終わります。

本書は、私が自衛艦隊司令官[2003.3－2004.8]のとき、艦艇長講習で三回講話した記録に基づいて、加除編集したものです。学生諸君が海上作戦部隊の艦隊気分を察知し「海上指揮官の^{おも}想い」を感得して頂ければ幸いです。

第1章 修羅の道

奈良市にある興福寺の^{あしゅら}阿修羅像を^み観る時、深い^{ゆうしゅう}憂愁に沈む少女に見えるのは、私だけであろうか。その^{うれ}愁いには、限り無き悲しみ・怒り・寂しさがある。

仏教では、^{あしゅら}阿修羅は、^{けんぞく}仏の眷属であり、^{やしゃ}仏法を守護する八部衆〔天・竜・夜叉・^{けんたつば}乾闥婆・^{あしゅら}阿修羅・^{かるら}迦楼羅・^{きんなら}緊那羅・^{まごらか}摩睺羅迦〕の一部である。

^{あしゅら}阿修羅の住む^{しゅらどう}修羅道とは、^{りくどう}六道〔^{じごくどう}地獄道・^{がきどう}餓鬼道・^{ちくしょうどう}畜生道・^{しゅらどう}修羅道・^{にんげんどう}人間道・^{てんどう}天道〕の一つで、争いや怒りの絶えない世界である。^{いくさ}戦では、^わ吾が行く^{さえぎ}手を遮る者あらば、^{とも}友に会うては友を殺し、^{きみ}君に会うては君を殺し、^{ちち}父に会うては父を殺す。これは^{しゅら}修羅の^{みち}道である。

👉 日本1960年代は革命前夜～間接侵略～治安出動の予感あり！
世界1970年代はソ連軍の脅威～第3次世界大戦の予感あり！

戦場における指揮官は、部下・味方が死ぬか又は相手・敵が死ぬかの場合、一般に相手・敵が死ぬ方を選ぶ。どちらを選択しようが、^{じんりん}人倫に^{もと}悖る^{しゅら}修羅の^{みち}道である。つまり、^{じんりん}指揮官は、平時には^{みち}人倫の道を歩めども、^あ有事に^{せいき}遇っては^{せいき}正気と^{せいき}生気を保ちつつ^{あしゅらおう}阿修羅王の^{ごと}如く^{きょう}狂と^{もう}猛との^{しゅら}修羅の^{みち}道を^な進まざるを得ない時もある^あろう。そして、平時に返れば、^{せいき}正気と^{せいき}生気により速やかに^{じんりん}人倫の^{みち}道に戻るのは当然である。

死ぬ事に覚悟はいらない。死ぬ時は「まッあ、いいかあ！」と死ねばよい。覚悟が有る人も無い人も、人は皆いつか死ぬ。まして戦場においては、覚悟が有る者も無い者も、^{たま}弾丸が当たれば平等に死ぬ。即ち、死ぬ（殺される）覚悟がなくとも相手がきちんと^{かた}方を付けてくれるのだ。しかし、米国陸軍^{ジョージ}ジョージ S. パットン Jr. 将軍が第二次世界大戦の欧州戦線で「米国の^{ため}為に死ぬ事が諸君の仕事ではない。諸君の仕事は奴等をドイツの^{ため}為に死なせてやる事だ。」と訓示したように、^{かた}相手を害する（殺す／傷つける）事には特別の覚悟がいるぞ！

^あ有事に^{しゅら}遇っては^{しゅら}修羅の^{みち}道を^な進まざるを得ない時もある^あ指揮官は、戦場に在っては^{あしゅらおう}阿修羅王となりて^{さんめんろくべ}三面六臂の活躍を^な為し、任務を完遂して味方の勝利に貢

献すべし。マキアヴェッリ [1469－1527] 曰く「天国に行く最も有効な方法は地獄へ行く道を熟知することである」と。強^{きやうじんふとう}韌^{けん}不^{にん}撓^ふの精神と堅^{けん}忍^{にん}不拔^{ふたつ}の勇氣と拔^{ぼつ}山^{ざん}蓋^{がい}世^{せい}の氣力を有する強^とい^と指^し揮^{くわ}官^{くわん}でなければ、兜^{みろく}率^ぼ天^{さつ}で修行中の彌^み勒^{ろく}菩^ぼ薩^{さつ}が釈^{しゃ}迦^か牟^む尼^に世^せ尊^{そん}〔ゴータマ・シッダルダ [BC565－BC484] 印度ヒマラヤ南麓の釈^{しゃ}迦^か族^{ぞく}の王子として4月8日誕生し、12月8日35歳で成^{じやうどう}道^{どう}し、2月15日80歳で涅槃^{ねはん}に入る〕の涅槃^{ねはん}後^ご五^ご十^{じゅう}六^{ろく}億^{いっ}七^{しち}千^{せん}万^{まん}年^{ねん}の後^ごに正^{しやうがく}覺^{かく}により成^{じやうぶつとくどう}仏^{ぶつ}得^{とく}道^{どう}して三^{さん}千^{せん}大^{だい}千^{せん}世界^{せかい}〔一^{いっ}仏^{ぶつ}陀^だが司^{つかさど}る世界^{せかい}＝六^{りく}道^{だう}世界^{せかい}の千^{せん}（小^{せう}千^{せん}）×千^{せん}（中^{ちゅう}千^{せん}）×千^{せん}（大^{だい}千^{せん}）の集^{しゅう}合^{ごう}世界^{せかい}／三^{さん}千^{せん}世界^{せかい}とも言う〕の人々を救済するまで、自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}が修^{しゅう}羅^らの道^{だう}を進^{しん}んで地^ぢ獄^{ごく}へ墮^おち責^せめ苦^くを受け続^{つづ}けるというような、悲^{かな}壯^{さう}な覺^{かく}悟^ごに堪^たえられないであらう！

●	仏 ^{ぶつ} 陀 ^だ ：覺 ^{かく} りを得 ^え た人	牟 ^む 尼 ^に ：聖 ^{せい} 者 ^{しや}	世 ^せ 尊 ^{そん} ：尊 ^{そん} 師 ^し
●	如 ^に 来 ^{よらい} ：真 ^{しん} 理 ^り に達 ^{たつ} した人		
●	菩 ^ぼ 薩 ^{さつ} ：未 ^{いま} だ仏 ^{ぶつ} 陀 ^だ に成 ^な らぬが、仏 ^{ぶつ} 陀 ^だ に成 ^な るべき資 ^し 性 ^{じやう} を備 ^び えた人物 ^{にんぶつ} である。		
●	自 ^じ 分 ^{ぶん} の為 ^{ため} でなく、他 ^た 人 ^{にん} の為 ^{ため} に自 ^じ 己 ^ぎ の身 ^み を犠 ^ぎ 牲 ^{じやう} に ^{して} 働 ^{はたら} く者 ^{もの} である。		
●	涅 ^ね 槃 ^{はん} ：常 ^{じやう} 〔永 ^{えい} 久 ^{きう} 〕樂 ^{らく} 〔心 ^{しん} に落 ^{らく} ち着 ^{ちやく} きが在 ^あ る事 ^{こと} 〕我 ^{われ} 〔自 ^じ 由 ^{ゆう} 自 ^じ 在 ^{ざい} 〕淨 ^{じやう} 〔心 ^{しん} の澄 ^{すみ} み切 ^き った事 ^{こと} 〕の安 ^{あん} 穩 ^{のん} の事 ^{こと}		
●	兜 ^と 率 ^{そつ} 天 ^{てん} ：三 ^{さん} 界 ^{かい} を構 ^く 成 ^{せい} する欲 ^{よく} 界 ^{かい} に属 ^{ぞく} する六 ^{りく} つ ^の 天 ^{てん} のう ^ち の第 ^{だい} 四 ^し 天 ^{てん}		
●	覺 ^{かく} りとは、真 ^{しん} 理 ^り 〔輪 ^{りん} 廻 ^ね の法 ^{ぽう} 則 ^{そく} 〕を認 ^{にん} 識 ^し して解 ^げ 脱 ^{だつ} 〔輪 ^{りん} 廻 ^ね の法 ^{ぽう} 則 ^{そく} の外 ^{ぐわい} に出 ^い るこ ^と 〕する事 ^{こと} をい ^い 、宇 ^う 宙 ^{ちゆう} 〔その化 ^{くわ} 身 ^{しん} が太 ^{たい} 日 ^{にち} 如 ^に 来 ^{よらい} なり〕の真 ^{しん} 実 ^{じつ} の姿 ^{すがた} を体 ^{たい} 現 ^{げん} する全 ^{ぜん} 認 ^{にん} 識 ^し 極 ^{ごく} 限 ^{げん} 状 ^{じやう} 態 ^{たい} である。覺 ^{かく} り〔正 ^{しやう} 覺 ^{がく} 〕という個 ^こ 人 ^{にん} 体 ^{たい} 験 ^{げん} を、大 ^{だい} 知 ^ち 大 ^{だい} 悲 ^ひ でも ^も つて思 ^し 索 ^{さく} に乘 ^{のり} せ説 ^{せつ} 法 ^{ぽう} して社 ^{しゃ} 会 ^{かい} 経 ^{けい} 験 ^{げん} に転 ^{てん} じ、更 ^{さら} には動 ^{どう} 植 ^{しつ} 物 ^{ぶつ} 国 ^{こく} 土 ^ど にも仏 ^{ぶつ} 性 ^{じやう} を觀 ^{かん} る自 ^み 然 ^{ぜん} 経 ^{けい} 験 ^{げん} に進 ^{しん} むべし。		
●	坂 ^{りやう} 本 ^ま 龍 ^ど 馬 ^ど 作 ^{いつ} の都 ^り 都 ^ん 逸 ^{えつ} 「三 ^{さん} 千 ^{せん} 世 ^{せい} 界 ^{かい} の烏 ^{カラス} を殺 ^{ぬし} し主 ^{ぬし} と朝 ^{あさ} 寝 ^ね がしてみたい」		
●	な ^お 、三 ^{さん} とはサ ^サ ン ^ン ス ^ス ク ^ク リ ^リ ット語 ^ご のサ ^サ ン ^ン （聖 ^{せい} なる）の漢 ^{かん} 音 ^{おん} 訳 ^{やく} である。		

- 1 3 7 億年前 我々の宇〔天地四方；空間〕宙〔古往今来；時間〕が誕生し、原子が生成した。
- 1 0 0 億年前 我々の銀河が誕生した。
- 4 6 億年前 太陽や地球が誕生した。
- 4 2 億年前 地球に海洋が出現した。
- 3 5 億年前 宇宙から左型アミノ酸が飛来して地球に生命が誕生した。

200万年前 人類〔人の細胞60兆個〕が出現した。

3.3～2.1万年前 日本列島に日本人の祖先が初渡来した。

1.2万年前 氷河期が終了して縄文時代が始まる。

A D 1 8 0 ^{じんむ}神武東征〔^{かむやまといわれひこのみこと}神日本磐余彦尊が^{ひむかのみみつのはま}日向美々津浜から大船団を^{ふな}船
^で出させた事に始まる。^{よない}米内総理揮毫の「日本海軍発祥之地」
の大記念碑が^{ひゅうがし}日向市美々津にある。〕

10億年後 太陽の膨張開始

水素燃料の減少により重力収縮を核融合膨張が上回る。

20億年後 地球の海洋^{こかつ}涸渴

人類は、遺伝子を変化させて太陽系の外へ移住し、知的生
命体としての存続を図る^{ちえ}智慧を有している^{はず}筈と信じる。

65億年後 太陽の膨張が水星軌道を越える。

70億年後 太陽の白色^{わいせい}矮星（地球規模）化

水素燃料の^{こかつ}涸渴により核融合が停止し重力で収縮する。

そういう強い指揮官のために、以下のとおり^{げき}檄を送りたい。

第2章 名將に学ぶ

1	カルタゴの名將ハンニバルの言葉……………	16 頁
2	英国提督ネルソンの自己同期形成……………	17
3	フランス皇帝ナポレオンの思索炯眼……………	18
4	米国將軍パットンのリーダーシップ解説……………	18
5	朝鮮戦争の英雄白善燁將軍語録……………	19
6	米国陸軍中佐ハロルドGムーアの出征に際し訓示……………	24

1 カルタゴの名將ハンニバルの言葉

第二次ポエニ戦役〔BC218－BC201〕のターラント攻略〔BC213〕成功の後、ハンニバル・バルカス〔BC247－BC183；BC218アルプス越えでローマに侵攻（28歳）・BC216カンナエ会戦に完勝（30歳）・BC202ザマの戦いでスキピオ（33歳）に敗北（44歳）〕は「多くの事は、それ自体では不可能事に見える。だが、視点を変えるだけで可能事に成り得るのだ。」と語った。

2 英国提督ネルソンの自己同期形成

英国海軍中將ホレイショ・ネルソン [1758－1805 海上勤務 35 年・参加海戦 120 回] 提督は、戦術信号「近接行動 close action；更に敵に近接して交戦せよ」のように簡潔な指示でよく知られている。簡潔な指示では発簡者の企図が完全に伝わらない事があるものだが、ネルソン艦隊ではそういう事がなかった。それは、ネルソンの部下の指揮官達が、時にはネルソン自身によって修正された『英国海軍ドクトリン（ネルソンによって解釈されたドクトリン）』に完全に習熟していたからである。権限委任の信奉者であったネルソンは、部下の指揮官が自己の知的能力とシーマンシップを活用するとともにネルソンの企図をよく理解して敵の機先を制する機動を行なうことを期待したのである。重要なのは、来るべき戦闘の様相を如何に考えるかについて、ネルソンが部下の指揮官達と討議するために多くの時間と努力を費やし、行動に係る状況認識を共有したことである。その結果として、ネルソンの部下の指揮官達は改めてネルソンの指示を求めること無しに、その目標とする事柄を追求して、独自に行動することが出来た。

< 註 > トラファルガー海戦 1805. 10. 21

at ジブラルタル海峡に近いスペインのトラファルガー岬沖

英国艦隊 27 隻 [ネルソン中將 (47 歳)] 戦死行方不明者 1690 名

旗旒信号；England expects that everyman will do his duty.

(英国ハ各員ガ己ノ義務ヲ果タサンコトヲ期待ス)

マスケット銃で狙撃されたネルソン提督は 1630 に戦死した。

今際の言葉「Thank GOD, I have done my duty.」

仏西艦隊 33 隻 [ヴィルヌーブ中將 (42 歳)] 戦死行方不明者 6953 名

< 註 > 第 1 級戦列艦 Line-of-battle ship ヴィクトリー (英国艦隊旗艦)

長さ 98.4m 幅 16m メインマスト高 60m 乗員 850 名

砲数 104 門：32 ポンドカノン砲 (最大射程 2500m) × 30 門

24 ポンドカノン砲 × 28 門

12 ポンドカノン砲 × 44 門

68 ポンドカロネード砲 × 2 門

満載排水量 4000 トン 搭載真水 300 トン 搭載ビール 50 トン

このネルソンタッチ (the NELSON touch＝難局に処するネルソン流の手

際)こそが自己同期形成 (self-synchronization) である。自己同期形成とは、時間と空間における事象・効果の適切な組み合わせ (例; 戦闘空間の情勢認識と指揮官の意思決定に係る状況認識とを共有する自分の分身を造る事) によって達成される所望結果 (例; 高級指揮官の分身を戦場に派遣して戦術の柔軟性と迅速な指揮・対処とを可能ならしめる事) である。

3 フランス皇帝ナポレオンの思索炯眼

ナポレオン・ボナパルト [1769-1821] は、若い頃、ギボン [1737-1794] 著『ローマ帝国衰亡史』を初めて読んだ折、カエサルが属州ガリア総督のとき BC49. 1. 12 ルビコン川を渡ってローマ執政官に再立候補のためポンペイウスとの対決を迫られる場面などでは、その都度本を閉じて「自分ならばこう決心する」との考えを纏めた後、本を開いて読み進んだという。幼少からの刻苦勉励・思索炯眼によって成就した天才であるナポレオンは、歴史上の英雄たちの修羅場を歴史書や戦史書により、頭上シミュレーションで疑似体験する努力を積重ねている。漫然と読書するのと、自分の決心を自問自答しつつ書中で疑似体験しながら読書するのでは、凡人と天才の差になることを肝に銘じ、常に自らの頭 (第一人称) でものを考える力を鍛錬する努力を惜しんではない。

第一人称で考えることが出来るようになると、第一人称で行動することが出来るようになる。それが指揮官である。

4 米国将軍パットンのリーダーシップ解説

- ・ 1909年に米国陸軍士官学校卒業 (席次 46 / 103)
- ・ 第2機甲師団長～第2軍団長～第3軍司令官～第15軍司令官

米国陸軍大将ジョージ S パットン Jr [1885-1945] 将軍は、「組織の所属者にとって必要な心理的要素は、自覚・自制・自信である。指揮官が“使命感に支えられた自覚”と“責任感に基づく自制”と“能力に裏付けられた自信”とで指導すれば、部下の消極的な自覚・自制・自信も競争心と自発性に味付けされた自覚・自制・自信に変貌する。即ち、リーダーシップとは、部下に自信を注入する事に他ならない。その自信は、部下をして個人として認められているという自覚を促し、部下をして誇りある自制をもたらす事にもなる。」と、リーダーシップを解説している。

5 朝鮮戦争の英雄 白善燁将軍語録

☛ 白善燁著『指揮官の条件』2002. 5. 31 草思社

ベクソニョップ
白善燁 [1920—] 将軍の指揮する韓国第一師団は、朝鮮戦争 [1950. 6. 25—1953. 7. 27; 韓国民間人の死者 3 7 3 5 9 9 名・負傷者 2 2 9 6 5 2 名・行方不明 3 8 7 7 4 4 名、韓国軍の死者 2 2 7 7 4 8 名・負傷者 7 1 7 0 8 3 名・行方不明 4 3 5 7 2 名、国連軍の死者 3 6 8 1 3 名・負傷者 1 1 4 8 1 6 名・行方不明 6 1 9 8 名、北鮮民間人の死傷行方不明約 2 7 0 0 0 0 0 名、北鮮軍の死傷行方不明約 6 0 0 0 0 0 名、中国軍の死傷行方不明約 1 0 0 0 0 0 0 名 (うち死者 1 4 8 6 0 0 名)] の初期において、洛東江東側の釜山円陣の突角を形成する倭館北側～水岩山～遊鶴山～多富洞～架山地区の最終防御正面 2 0 Km を受け持ち、釜山橋頭堡攻防の天王山として知られる“多富洞の戦闘 (1950. 8. 4～9. 16)”で北鮮軍 3 箇師団強の猛攻によく堪え、マラリア罹患の師団長先頭の突撃を含めた反撃防御・連合作戦により北鮮軍を撃退した。この時、韓国第一師団 (8 月の死傷者 4 0 0 0 名) が多富洞の防御線を死守できなかったら、大邱が落ち、釜山が落ち、そして韓国が消滅していたであろう。その後の攻勢転移で韓国第一師団は、主攻の米国第 1 騎兵師団より早く、歩戦砲工飛の諸兵科連合戦術で 1 9 5 0. 1 0. 1 9 (土) 平壤一番乗りを果たした。

『若き将軍の朝鮮戦争 — 白善燁回顧録 — 2000. 5. 30 草思社』等による将軍の経歴は、

1920. 11. 23 ^{ピョンアンナムドカンソゲンカンソミョントクフンリ} 平安南道江西郡江西面徳興里 (^{ピョンヤン} 平壤の南西) に生れる。

1927. 4. ^{ピョンヤン} 平壤の国民学校入学

1934. 3. ^{ピョンヤン} 平壤の国民学校卒業

. 4. ^{ピョンヤン} 平壤師範学校尋常科 [五年制] 入学

(日本民族 10 人・朝鮮民族 9 人)

1939. 3. ^{ピョンヤン} 平壤師範学校尋常科 [五年制] 卒業

1940. . ^{ほうてん} 満州国 [人口 3 00 0 万人・軍隊 10 万人] 奉天軍官学校入校

生徒隊長 (皇弟) ^{プージェ} 溥傑

1941. 12. 30 満州国奉天軍官学校卒業 (第九期生)

～満州国軍歩兵第二十八連隊見習士官 at ^{トオチン} 宝清

1942. . ～満州国軍新兵訓練所小隊長 at ^{ジャムス} 佳木斯

1943. 2. ～満州国軍間島特設隊 at 間島省 (現在の中国 ^{イェンピアン} 延 辺 朝鮮族自治区)

主任務; 潜入・破壊工作、 従任務; 抗日ゲリラ討伐

民弊防止を徹底させて民衆を味方に就ける事が鍵である。
対ゲリラ戦で最も効果的な戦法は、待ち伏せ攻撃であるので、強い使命感・忍耐力で待ち、高い射撃規律・射撃技倆で攻撃し、優れた体力・気力で残敵を連続追跡するとよい。

{対ゲリラ戦の戦訓}

1945. 3. ~満州国軍国境監視隊 at^{イエンチー}延吉 [陸軍中尉]
. 9. 下^{イエンチー}延吉を8.20に発ち徒歩800Km・野宿1ヶ月で^{ピョンヤン}平壤に帰還
. 10. 朝鮮民族運動家^{キムイルソン}チョ・マンシク事務所で^{キムイルソン}金日成と会う機会あり
. 12. 上^{かいらい}ソ連軍の傀儡として朝鮮共産党北部朝鮮分局の^{キムイルソン}金日成(ソ連軍大尉^{キム}・^{ソンジュ}ソンジュ)が北朝鮮の実権掌握
. 12. 25^{ピョンヤン}平壤を汽車で発ち徒歩で38度線を越えてソウル着12.29
1946. 2. 26 国防警備隊に入隊して警備隊中尉(*25歳)に任官
第五連隊A中隊長を拝命
. 9. ~第五連隊第一大隊長
1947. 1. 1~第五連隊長 at^{ブサン}釜山 [警備隊中佐]
. 12. 1~第三旅団司令部参謀長 at 釜山

治安回復作戦の要諦は、第一撃に全力を投入して不穏分子を圧倒してしまう事である。 {^{そうじょう}済州島大騒擾の戦訓}

1948. 4. 11~国防警備隊総司令部(独立後の陸軍本部)情報局長 at ソウル

新編された第十四連隊(at^{ヨス}麗水)には、厄介者として転属させられた既存連隊の不満分子・左傾分子及び志願転属した朝鮮共産党の軍内細胞が集まることとなり、編成道義が守られなかった。 {第十四連隊反乱の戦訓}

^{しゅくぐん}肅軍で検挙された陸軍本部作戦教育局^{バクチョンヒ}朴正熙[1917-1979 帝国陸軍士官学校57期卒~朝鮮共産党幹部~韓国第五代大統領]課長を助命上申する。^{バクチョンヒ}朴正熙少佐が刑執行停止・除隊となったので文官として陸軍本部情報局戦闘情報課に勤務させる。

- . 8. 15 大韓民国(初代大統領^{イスンマン}李承晩[1875-1965]博士)の成立
. 11. 陸軍大佐(*28歳)
1949. 6. 29 米軍の韓国撤退
. 7. 30~第五師団長 at^{クワンジュ}光州

ゲリラ討伐作戦の神髄は民心収攬^{しゅうらん}である。智異山^{チリサン}共産ゲリラ討伐作戦要領は、まず山頂の拠点^{がいかく}を占領し、外郭^{かくらん}を包囲して情報・食料を遮断し、包囲網の中に攪乱部隊^{かくらん}を入れてゲリラ移動を封止し、待伏せ戦法^{せんめつ}で攻撃し、連続追跡で殲滅^{せんめつ}する。

1950. 4. 23～第一師団長 [9 7 1 5 名 : 3 箇歩兵連隊・1 箇砲兵大隊

・1 箇工兵大隊] at水色^{スセク} (ソウル近郊)

任務 ; ^{サンバルソン}三八線 (9 0 Km 正面) の監視・確保

六二五^{ユギオ} [1950. 6. 25 (日) 0400i] 奇襲前

● 6 . 1 0 付の人事異動・隷属替え・部隊移動で準備不足

● 高級将校が学校入学・海外留学・海外視察で部隊を留守

● 6. 11 からの警戒待機が 6. 23. 2400i 解除され外泊休暇許可

● 6 . 2 4 (土) 陸軍参謀総長主催^{ヨンサン}龍山将校クラブ開所式

. 7. 25 陸軍准将 (* 2 9 歳)

1951. 4. 6～第一軍団長 [2 箇師団・1 箇野戦工兵団]

(★ 悪天候で搭乗機墜落死亡の^{キムベクイル}金白一第一軍団長の後任 ★)

. 4. 15 陸軍少将 (* 3 0 歳)

. 7. 10～9. 兼休戦会談韓国軍代表 at^{ケソン}開城 / 東京

. 11. 16～野戦戦闘司令部司令官

^{テジョン}大田以南に戒厳令を宣布して共産ゲリラ討伐作戦を行なう。

1952. 1. 12 陸軍中将 (* 3 1 歳)

. 4. 5～第二軍団長 [3 箇師団・1 箇軍団砲兵・1 箇軍団工兵]

. 7. 23～第七代参謀総長兼戒厳司令官 at^{テグウ}大邱 ⇒ 師団増設計画

1953. 1. 31 陸軍大将 (韓国で最初 * 3 2 歳)

. 7. 27 朝鮮戦争休戦

. 10. 1 韓米相互防衛条約締結

1954. 2. 14～初代第一野戦軍司令官 [第 1 ・ 2 ・ 3 ・ 5 軍団] at^{ウォンジュ}原州

1957. 5. 18～第十代参謀総長 at ソウル ⇒ 韓国軍の近代化

1959. 2. 23～連合参謀会議議長 at ソウル

1960. 4. 27 ^{イスンマン}李承晩大統領の退陣

. 5. 31～予備役 (* 3 9 歳)

. 7. 15～駐中華民国大使 ㊦ 蒋介石総統・宋美齡夫人

1961. 7. 4～駐フランス大使 ㊦ ドゴール大統領

兼駐スペイン大使 🇪🇸 フランコ総統

1965. 7. 12～駐カナダ大使

1969. 10. 21～1971. 1. 25 交通部長官 at ソウル

日本航空よど号ハイジャック事件⇄⇄⇄⇄ソウル地下鉄建設

1971. 6. ～1973. 3. 国策会社・忠州肥料^{チュンジュ}社長

1973. 4. ～1980. 3. 国策会社・韓国総合化学工業^{ケイ}社長

1980. 4. ～19 . . 六二五戦争^{ユギオ}記念事業の企画・準備・実行 at ソウル

1990. . ～ 韓国戦争記念館館長 at ソウル

1995. . 日本国勲一等瑞宝章を受章

2001. 12. 12 (水) 1800～2000 at 明治記念館

海幹校AC学生・陸幹校AC学生共催^{ベクソニョップ}白善燁將軍を囲む会

2003. 11. 25～27 陸上自衛隊第7師団 (東千歳)・第11師団^{まこまない} (真駒内)

・第2師団 (旭川) で講演

である。

私が防衛研究所一般課程研修員の時、訪日中の^{ベクソニョップ}白善燁將軍は、我が韓国研修団のために帰国され、1989. 6. 28 (水) 1930～2130在韓日本国大使主催の防衛研究所第36期一般課程研修員韓国研修団歓迎晚餐会に出席されて、回想録『軍と私』などについて話された。そして、1989. 6. 29 (木) 1300～1715、韓国研修団のマイクロバスに同乗された^{ベク}白將軍は「多富洞^{タブドン}戦跡」現地戦術教育の一環として、戦闘状況について説明されるとともに研修員の質問に懇切に答えられた。この時、私が^{ベク}白將軍から^{じか}直に^{うかが}伺った戦訓は次のとおりである。

1 共同の極意

(1) この戦争^{いくさ}は韓国の戦争であるので、韓国軍がより危険な所 (死地) に跳び込んで連合軍よりも働き、^{みづか}自らの国は自ら身命を賭して守る気概を行動で示す。

(2) 国連軍各国の文化・伝統・制度の相違をお互いに認めて尊重し、その相違から発生する諸問題を解決する^{ちえ}智慧を発揮する。

ex. 3時になるとティータイムのため砲撃を中止する英軍砲兵隊

ex. 夜になるとステーキタイムのため進撃を停止する米軍戦車隊

その^{ちえ}智慧とは、有言実行など誠意ある行動をとる事、怒らない事及び上級司令部の指示は多少無理してでも受入れて文句を言わない事であ

る。(帝国陸軍は現地軍を育てて使いこなすことにかけて下手^{へた}だった。)

米軍は共同作戦の上手^{じょうず}な軍隊であり、英語があまり判^{わか}らなくとも大きな問題はないが、現地軍が約束を守らなかったり他人任せ^{まか}の行動をしたり体面から高飛車な態度を執^とったりすると、信用はなくなるうえに調整も出来ず、結局のところ米軍の支援を受けられなくなってしまう。

- (3) 韓国陸軍第1師団は、「助^{すけ}っ人の国連軍将兵は、快適な生活等で優遇されて気持ちよく働き、出来る事なら五体満足で帰国してもらいたい」という心構えで、配属された外国部隊を大切にする(米砲兵の護衛中隊／米戦車兵の夜間警備中隊 etc.)とともに、自らが精強で在り続ける。

- 2 死生観とは、職業意識と責任意識である。

- 3 戦争^{いくさ}は、指揮官どうしの辛抱^{しんぼう}競^{くら}べに外ならぬ。頑張^{がんば}っておれば、いつかは戦機^{いくさ}が訪^{おとず}れる。辛抱^{しんぼう}に負けた方が敗北を自認し、辛抱^{しんぼう}強^{しんぼう}かった方が戦場に残る。そこで、指揮官は誰よりも辛抱^{しんぼう}強^{しんぼう}くて辛抱^{しんぼう}する念力がなければならぬ。堪^たえ忍^{しの}ぶ力こそ、戦勝の原動力である。つまり戦闘においては、堪^たえて堪^たえて最後の瞬間まで戦うという敢闘精神を持つ者の頭上にのみ、勝利の栄光が輝く。

- 4 高級指揮官になるほど手持ち手段(例：近接航空支援)が多くて対処が容易なものだから、困難な作戦／戦闘になればなるほど、高級指揮官は現場に進出して陣頭指揮に徹し、その苦戦を打開すべし。

- 5 高級指揮官が第一線^{おとず}を訪れることほど、戦場において、将兵に安心感を与えて士気を高めるものはない。

ex. 1950. 6. 29 羽田から水原^{スウォン}へ飛来した米国極東軍総司令官マッカーサー元帥(70歳)による永登浦^{ヨンドンポ}の最前線視察

ex. 1950. 8. 23 米国陸軍参謀総長コリンズ大将による多富洞^{タフドン}の最前線視察

- 6 予想される戦場地域は、必ず事前に現地視察をして、自分の目で確かめておく現場第一主義に徹すべし。

- 7 上級指揮官の護衛は、臆病^{そし}と謗られるほど、徹底してやるべし。

- 8 国内戦は、住民保護というデメリットもあるが、住民協力というメリットもある。起伏の多い多富洞^{タフドン}地区では、村人の人力による弾薬・飲料水・糧食の荷揚げ及び負傷兵の後送という労役提供を受け、戦闘に専念出来た。

- 9 主要構造物の爆破は必ず命令書を受領し、後々^{のちのち}までそれを保管しておく

べし。

ex. 1950. 6. 28. 0230i ^{ハンガン}漢江人道橋を爆破した工兵監は軍法会議で銃殺となる。

- 1 0 燃料パイプラインと弾薬貯蔵所は、平時から建設しておく、戦時に極めて便利である。
- 1 1 艦上機の緊急着陸飛行場は、必ず確保しておく。ex. ^{ウォンサン}元山・^{カンヌン}江陵・^{ヨンイル}延日
- 1 2 大規模長期戦には、大量生産循環方式の教育訓練制度が必要である。
- 1 3 軍隊の命脈は軍紀にあり、外地では特に注意を要する。

6 米国陸軍中佐ハロルドGムーアのベトナム戦争出征に際し訓示

- ・ 1 9 2 2 年に生れる
- ・ 1 9 4 5 年に米国陸軍士官学校卒業
- ・ 朝鮮戦争で歩兵中隊長
- ・ ベトナム戦争で歩兵大隊長（1965. 11. 14－11. 16 南ベトナム中央高地イアドラン谷の戦闘 📖 1 9 9 2 年出版『WE WERE SOLDIERS ONCE... AND YOUNG』／ 2 0 0 2 年映画「ワンス&フォーエバー」）そして旅団長
- ・ 1 9 7 7 年に陸軍中將で退役

ベトナム戦争出征に際し、第1大隊（とその家族）に訓示

1 9 6 5 年 8 月 フォートベニングにて
米国陸軍第7航空騎兵連隊第1大隊長
陸軍中佐ハロルドGムーア

我々はもうすぐ死の影の谷へ向かう。そこでは同胞として、君が隣の者の背後を、隣の者が君の背後を、守ることとなる。そんな時、肌の色や宗教の違いなんぞ関係ない。皆、家を離れるが、我々が行った先が我々の家だ。

我々は、頑強で自信に満ちた敵と戦うため、出征する。私は「全員を祖国に生還させる」と約束する事が出来ない。しかし、諸君と神の前で、私はこれだけは誓う。「我々が戦いに臨んだ時、私は戦場に踏み出す最初の者となり、私は戦場から退く最後^ひの者となろう。私は誰^{だれ}一人として戦場に置き去りにしない。死者も生者も我々は全員そろってアメリカへ帰る。」と。

第3章 峠からの指揮官像

by 第2護衛隊群司令 [1995.12.15～1997.7.1] 牧本将補

あらゆる事態に即応して任務を完遂し得る態勢を充実し、名実ともに体力のある精強な部隊を錬成するためには、積極的に作為された複合脅威下における訓練環境等を通じ、あらゆる不測事態を想定し、現有装備の全能発揮・全幅活用により、**实际的**（洋上における機関銃射撃及び内火艇による武装立入検査隊乗船を演練）・**実戦的**（訓練艦に秘のシナリオに従って実目標／疑似目標を使用し長時間に亘り何が生起するのかわからない緊張を強いて各種戦の緊急対処を演練）**な厳しい訓練の精到による修羅場の疑似体験しかないことは言うまでもない**。智慧も出さず工夫もせず、ヒト不足・モノ不足・カネ不足などを言い訳にして安易に流れていると、**来りつつある防衛力運用の時代に、部隊を危険に陥れて恥を古今東西に晒しかねない**。

訓練精到の必須を自覚し修羅場の疑似体験を主体的に心技体で会得した精強な八艦八機（1DDH・2DDG・5DD・8HS／兵員2000名）の第2護衛隊群（定係港；佐世保）を形作るのは個々の乗組員・搭乗員である。そこで、**士気旺盛にして心身ともに健康かつ強靱な護衛艦乗組員・艦載機搭乗員の育成を図ることを**（もく）**と**、**服務指導に当たっては、艦内生活とともに上陸中の個人生活の充実にも十分配慮しつつ、健全な社会人としての資質の涵養に努めさせる必要がある**。そして、**武人船乗り／武人飛行機乗りとしての躰教育の徹底及び護衛艦／航空機運航等に係わる基礎的技能の向上を図り、ファイティングシーマンシップの育成に努めるとともに、“天空海闊の心でネアカ・ノビノビ・ヘコタレズ、上意下達・下意上達で当たり前前（や）の事を当たり前前に遣る”**隊風を醸成しなければならない。

その隊風を醸成するのは指揮官である。現状を（かんしょう）**観照**すると、坂の上の雲を見ながらひたすら登ってきた海上自衛隊にとって、今や一つの峠にさしかかったところである。峠までの指揮官は（こわもて）**強面**で部下を叱咤激励すればそれだけで成果が上がったものである。それは「勇将の下に弱卒なし」を地でいけた時代だったからでもある。しかし、価値観が多様化して怒られつけていない世代が主流になることと相俟って、峠からの指揮官はそれだけでは（つと）**勤まらない**であろう。それは、**複雑化・多様化・分散化・広域化・無構造化した、全方位・不特定の不透明・不確実という懸念／危険／脅威に対応／対処しなければならないから**である。峠からの指揮官には、少なくとも**温顔で高感度・高安定・高淡泊な人**

格及び長期的先見性・短期的指導性のある資質が要求されるものと思料する。

◇ 候補生には良質の、或いは^{ある}少なくとも感じの^よ好い者が大勢いるのに、良質の海尉はもっと少ないし、良質の艦長は更にもっと少なくて、良質の提督となるとゼロに等しい。その理由は、“海軍士官には、職業上の手腕、喜んで甘受できる性格、優れた人格、生れつきの威信及び其の他諸々の美德に加えて、**権力行使の習慣化から生じる悪い影響すなわち人間性を失わせるような影響**に抵抗するという更に遥かに^{きしょう}稀少な免疫性の資質がなければならない。”の^{ほとん}に、殆どの海軍士官がそうした免疫性の資質を有しないからである。権力は人間性を弱める^{もと}素だ。其の上、海軍の特質から考えると、そうした免疫性の資質は後にならなければ探知できない。しかし、存在している事は確かだ。そうでなければ、^{きしょう}稀少では在るが全人的な^{たぐ}類い^{まれ}稀な提督たち、例えばダンカンやネルソンのような典型をどう説明すればいいのか！

[パトリック・オブライアン著『特命航海、嵐のインド洋』から、

英国海軍フリゲート「サープライズ」軍医 スティーブン・マチュリン]

○ 海軍訓令に在る活字の海軍及び洋上に在る現実の海軍との間には、大変な違いが有る事が証明されている。

[パトリック・オブライアン著『攻略せよ、要衝モーリシャス』から]

○ 海軍では、エンジニアリングについて学ぶべきことがあまりにも多く、リーダーシップについては十分に学べない。そこで、大抵の艦長はその時々^の理想の指揮官像に合致さすべく自分自身を変えていく。

[トム・克蘭シー著『恐怖の総和』から]

○ 自分一人で何もかも知ることは出来ないんだから、私は他人の話に耳を傾けるんだ。 [トム・克蘭シー著『恐怖の総和』から、

米国潜水戦隊司令官 海軍大佐 バートロメオ・マンキューソ]

◇ 上官を感心させる方法は沢山ありますが、乗組員をそうさせる方法は一つしかありません。[トム・克蘭シー著『恐怖の総和』から、

元米国SSN「ダラス」ソナー員 ロナルド・ジョーンズ博士]

× 人格の一端に、不必要な緊張を部下に^し強いるような面があるので、部下が^{いしゆく}萎縮してその能力を十分に引き出せない。

× 部下の現状を把握もせずして、^{やみくも}闇雲に厳しすぎ、要求が多すぎ、なかなか満足しないので、部下が^{こんぱい}疲労困憊してその能力を十分に発揮できない。

有事といえど平素やってることしか出来ないのだから、自分の部隊をよく知って関係令達類や守則・標語などを勉強し戦史を研究する‘学’の段階から始め、指揮能力向上を任務遂行上の必須要件ととらえC⁴Iを通じて指揮能力の範囲を拡大する‘術’の段階へと進み、動物的勘を^{かんよう}涵養して戦争に^{いくさ}征って^い任務を完遂し生きて帰れる‘芸’の段階へと精進すべし。

[illegible]

真に神のような態度が必要になる

第4章 艦長の必要条件

by 第47護衛隊司令 [1992. 3.23～1993. 7. 1] 牧本 1 佐

1	指揮統率力	28
2	運航能力	30
3	戦術能力	30
4	戦争以外の軍事作戦（M O O T W）有効遂行能力	31
5	国際法・国内法・R O E の精通活用能力	31
6	渉外能力	31
7	管理能力	32
8	先輩の教え	33

N A V Yとは普遍性を有する文明である。海洋は前例踏襲・難題先送^{なんだいさきおくり}を許さないリアリズムの支配する世界であり、千変万化する海洋を行動する艦船は逃げ場も隠れ場もない生命共同体である。艦長は、オールマイティであると同時に全責任者でもある。

1 指揮統率力^{とうそつ}

（1）指揮官

有事といえど平素やってることしか出来ないのだから、関係令達類や守則・標語などを勉強し戦史を研究する‘学’の段階から始め、指揮能力向上を任務遂行上の必須要件ととらえC⁴Iを通じて指揮能力の範囲を拡大する‘術’の段階へと進み、動物的勘^{かんよう}を涵養^いして戦争に征^{いく}って任務を完遂し生きて帰れる‘芸’の段階へと精進すべし。

『海上自衛隊作戦要務準則』にある連続情勢判断を実施する際、日本人も陥^{おちい}りやすい欠点を提示するので、心に留^とめておいてほしい。それは、ガイウス・ユリウス・カエサル[BC100－BC44]が書き記^{しる}した「人間ならば誰にでも全てが見えるわけではない。多くの人は自分が見たいと欲する事しか見ていない。」ということである。つまり、「見たくないものは見えない」「聞きたくないことは聞こえない」「期待してない結果は事実と認めたくない」という事である。つまり、Iという原因からOという結果を期待したのに、現実^ははXという結果が出たとする。その時、我々は「こんな筈^{はず}じゃない」として、現実のXを虚構^{ウソ}と考^くえて現実を無視しがちである。そして、「こんな筈^{はず}じゃない」「こんな筈^{はず}じゃない」と現実を無視し続け、我に都合の良い結果のみに期待して、失敗の処理に失敗してしまうのである。

これに^{おちい}陥らない方策は唯一つ、我々日本人が失敗の処理に失敗した歴史を研究し、現実を直視する勇氣と現実から出発する^{ちえ}智慧とを磨くことである。

人は失敗することがあり、物は故障することがある。古来これが世の習いである。つまり、海の上でも一時的失敗〔cf. かかる難局に直面した場合、指揮官は動揺を見せない図太い態度もまた必要である。〕は避けることができない。しかし、^{から}空頼み作戦でない限り、この一時的失敗で戦闘に敗北することはない。**戦闘に敗北するのは、失敗の処理に失敗するからである。**即ち、失敗の処理に成功すれば傷口が局限され、失敗の処理に失敗すれば傷口が拡大して致命傷になるのである。

よって、日常の業務や訓練等における各種の不測事態をあらかじめ予測しておき、その対処計画を綿密に準備し、繰り返し繰り返し演練することである。そして、訓練・演習は失敗を体験する為に行なわれるものとし、訓練や演習で失敗を体験すると^{よろ}宜しい。それでも各種小失敗は生起するので、この小失敗を改善・変革の^{げき}機として、各種小失敗を克服して更に強い部隊に脱皮させる。こういう積重ねが、任務完遂の‘強い艦長とタフな乗員’に成長させていくのだ。

(2) ^{とうそつ}統率者

リーダーシップとは、最善観をもって美点を^{ぎょうし}凝視して“部下に自信を注入すること”に他ならない。その自信は、部下が「個人として認められている」という^{うなが}自覚を促し、部下として誇りある自制をもたらしことにもなる。(人格に問題のあるリーダーは、^{しか}叱り方に問題があり、感情的であるうえに他人の言を聞かない！) 部下統率の出発点は修身涵徳と身上把握にある。大いに人間に対する興味を持ち、身上把握を服務事故防止の為の管理としてでなく戦場で勝利を得る為の統率として実践されたい。

また、リーダーシップとは重要事項は何なのかを決める事であり、マネージメントとは重要事項から優先して^や遣る事である。これ等が出来る事を“常識が有る”と言う。

〈参考図書〉 ^あ安能^の務著『春秋戦国志』 講談社文庫 1992年

指揮統率の対象は人間である。中国四千年史のなかで、国家形態の原型が造られて中国故事名言の九割以上を産んだとされる春秋戦国時代を研究すれば、人間の^{あら}凡ゆる^{もうら}類型を網羅出来る。

〈参考図書〉 山本七平著『帝王学 — ^{じょうがんせいよう}貞観政要の読み方 — 』

文春文庫 1990年

唐の第2代皇帝（626－649）太宗〔李世民 598－649〕が群臣と政治上の得失を問答した言を集録し治道の要諦を説いた書『貞観政要』を、組織と個人の問題として考察してある。

〈参考図書〉 池波正太郎著『鬼平犯科帳』 文春文庫 1974年

火付盗賊改の長谷川平蔵は義理も人情も心得た統率者である。

2 運航能力

船乗りは、大自然に直接向き合う、現代で数少ない職業の一つである。この大自然の中で生き抜くためには、細心かつ大胆でなければならない。まして、船乗り&戦士たる我々においておや。そこで、海上生活者（真の船乗り・海の玄人）の原点に立ち返るべし。

いささか婆心をもって付け足せば、応用的運航技能を修得する場合、「相手船は非合理的に動く事がある（＊航海術科訓練装置NATでは相手船は必ず合理的に動く！）ことを勘案して当方は運動する」という癖を付けるとともに、“理に適った強気の操艦”を心掛けると宜しい。

〈参考図書〉 パトリック・オブライアン著『攻略せよ、要衝モーリシャス』

ハヤカワ文庫 2004年

人命の価値については、理屈で過大評価してはいないだろうか。何しろ、現実には、斬り込んで来た相手をピストルで撃つのを一瞬でも躊躇ったり、後で考え直したりする者は、この中に一人もいない筈だ。更に言えば、我々の艦は出来るだけ多くの敵を来世へ吹き飛ばす為に態々造られている。これは厳しい勤めだし、厳しい規律が必要だ。

将官達には、何かが取り付くらしい。その何かのせいで、人前で立ち上がって長々と時間をかけて喋り、その間にもっと長い間合いを取ったりもするようだ。

〔英国海軍戦隊司令官兼大型フリゲート艦長ジャック・オーブリー〕

3 戦術能力

アラン・ドロンの主演の『怪傑Zorro』という映画があった。縦横無尽に活躍するZorroとは、カリブ海地方の言葉で「黒い狐の精霊」のことである。狐のような智慧を持って、環境を自分の庭とし、新しい戦術を次から次へと繰り出して、敵を翻弄すべし。そして、自艦は沈まないで母港に帰投することが出来る。

〈参考図書〉 池波正太郎著『真田太平記』

群雄割拠する戦国の世に伶俐な頭脳と強引な腕力を振って領地の拡大に努めた真田昌幸とその次男の真田幸村は、信州上田城で、中仙道を上る徳川秀忠の第二軍四万を僅か千余の手勢で釘付けにして、関ヶ原の決戦に間に合わなくさせた。正に、老練な戦巧者の面目躍如という場面であった。こういう真田家の盛衰の物語である。

4 戦争以外の軍事作戦（M O O T W = Military Operation Other Than War） 有効遂行能力

単艦で海外へ派遣されて平時から危機時に係る任務を完遂し、自艦も乗員も五体満足で母港に無事帰投することが出来る。

5 国際法・国内法・R O E の精通活用能力

国際法規・国内法令・関係規則類・部隊行動規定（R O E = Rule Of Engagement）に精通して、自らが実施する作戦の合法性について細心の注意を払うのは当然として、我が行動の正当性を主張でき、相手の不法性を立証できる。

6 渉外能力

（１）会見

艦長は世界の海軍に習い、戦闘指揮官としてだけでなく、外交官や民政官としての知識・技能も有すべし。単艦で海外へ行って任務を果たし帰投してから記者会見を為さねばならない場合から、単艦で総監部等の所在しない地区に入港して表敬訪問・記者会見を果たさなければならない場合まで、大小各種のケースが考えられる。

（２）広報

訓練であれ、実オペレーションであれ、その成否を左右するほど広報は重要であることを銘記すべし。マスコミに海上自衛隊のグッドイメージを報道してもらうため、また海自隊員以外の人に海上自衛隊の良さを理解してもらうため、「広報の妙諦は、人間を觀せ、好印象を与えること」と心得なければならない。

（３）伺候

上級指揮官は即応・安全・情報・保全・人事・後方・広報・対外影響などに第一義的関心を有しているので、艦長は上級指揮官のもとへ積極的に

伺候すべきである。

7 管理能力

管理とは、“機会損失の減少を図ること”をいう。

カエサル[BC100－BC44]の言う「上に立てば立つほど言行の自由は制限されざるを得ない。」を噛み締めて、まず自分自身を自己管理すべし。

業務管理、安全管理、秘密管理、応饗管理及び健康管理を適正に実施することによって、“ネアカ・ノビノビ・ヘコタレズ、当たり前^やの事を当たり前^{じょうせい}に遣^いる艦風”を醸成^いして何時でも何処でも如何なる事態にも即応して任務を完遂し得る精強な護衛艦「□□□□」を錬成し維持するとともに、乗員が‘遣り甲斐^や’^がを感じる^いことのできる艦務運営に努め、“吾、事^{こと}において後悔せず”の心境に達すべし。それが、上司／先輩には安心され、同僚／同輩には信じられ、部下／後輩には慕^{した}われる艦長／指揮官へ至る道である。

(1) 精強・即応

海上自衛隊の標語「精強・即応」は、精神的規定であって、数値化された具体的規定でない。

もし、‘精強’に数値化された具体的規定があるとしたら、‘精強’は、探知率・撃破率・残存率に比例し、サービス事故率・装備品故障率・艦船航空事故率に反比例する。

もし、‘即応’に数値化された具体的規定があるとしたら、‘即応’は、可動率に比例し、事象生起から事象対応までのリアクションタイムに反比例する。しかし、準備の法令的根拠・予算上裏付けが未定の状況下で突っ走^{こと}ることは、‘即応’の対象外である。

(2) 艦務運営

月曜朝刊の週間内外予定や防衛庁・自衛隊ホームページを確認し、艦務運営を修正して国内外の状況に適応する。艦務運営は、我・敵・環境という複雑系世界の中で各々の変化にどう適応するかで、その成否が分かれるところである。よって、刻々変化する環境を読み解くためにも、月曜朝刊の週間内外予定などに眼を通して国内外情勢把握の一助とすべし。

(3) 日常業務

ア “吾、事^{こと}において後悔せず”の心境に達す^{ため}には、まず艦長自身が先任海曹室・各居住区・各職場を毎日廻^たって艦内現場の掌握、部下身上の把握及び艦内情報の共有を図り、士官室食事後の雑談指導を継承するこ

とである。因みに、指導とは刑法等に触れる犯罪を対象とせず！

イ 演習だけでなく日常業務にも、『海上自衛隊作戦要務準則』と Hot Wash-up を適用する。

ウ 艦内業務・艦上作業の安全手順標準化

ありとあらゆる艦内業務や艦上作業の安全を図るため、各艦内業務や各艦上作業の諸手順を標準化して『艦内業務標準・艦上作業標準 (Standard Working Procedures)』を策定し、運動力の無い若年者及び運動力の鈍^{にぶ}った中年者を守る。

但し、策定については、「①他艦・他部隊と情報交換して艦内業務・艦上作業の項目選定、②助水交会の海上自衛隊OB会員による起案、③海上訓練指導隊群による確認、④タイプコマンダーによる策定」方式が無難であろう。

〈参考図書〉 パトリック・オブライアン著『勅任艦長への航海』

ハヤカワ文庫 2003年

船乗りは、他職業に比し、社会生活に不適合である。その理由は、船乗り本来の生活環境である洋上に^あ在る時、船乗りは現在という世界しか無く、現在にしか生きられないからである。船乗りは過去について^な為し^う得る事は、何一つない。また、絶大な力を持つ気まぐれな大海原と天候を考えれば、未来についても船乗り^なに^う為し得る事は極めて限られている。^{ちな}因みに、水兵たちの^{むしりよ}無思慮な態度の元凶もここに^あ在る。

そして、海水と距離は愛を洗い流すので、社会と益々^{そえん}疎遠になる。

8 先輩の教え

✿昭和53. 12. 1 前海幕長 海将(Rtd.)中村 悌次

「私の指揮官十戒」

- 1 指揮官としての責任感に徹せよ
- 2 私心を去れ
- 3 目的を見つめよ
- 4 指揮官は決心するために存在する
- 5 指揮官は剛毅たらざるべからず
- 6 厳にして慈あるべし
- 7 健全な軍事判断力を持て
- 8 柔軟性を忘れるな

9 謙虚たれ

10 タイミングのセンスを掴め^{つか}

☼昭和62. 6. 12 護衛艦隊司令官 海将 小西 岑生

「艦長の心得」

- 1 我が儘^{わ まま}をいうな
- 2 意見をよく聴け
- 3 私心を持つな

欲は少なめに、先憂後楽、人の好き嫌いは程々に

- 4 明白な意図を示せ
- 5 信念を持った部下指導

阿^{おもね}るべからず、口喧^{くちやかま}しいと言われるぐらいでちょうどよい

- 6 部下よりも勉強
- 7 体力の錬磨
- 8 固定観念^{とら}に囚われるな

☼昭和62. 6. 25 開発指導隊群司令 将補 白石 洋介

「艦長の心得」

- 1 部下統率

- 誠意；部下と共に汗を流す

コミュニケーションの機会を積極的に持つ

- 節；和して同ぜず（原理原則を曲げない！）

- 2 指揮官の判断

- ファーストインスピレーションが正しい
- 迷ったら、自分の苦しい方を採用すべし

- 3 幹部への指導

- 一般常識と読書
- Seamanの心得とN a v yの伝統

☼昭和63. 8. 13 佐世保地方総監 海将 佐久間 一

「指揮官心得」

- 1 上意下達・意思疎通^{そつう}の環境

◇ イエスマンをつくるな

- 次席は、指揮官と異なるアプローチで問題を確認し、
判決をチェックすべし

2 部下指導は厳しく、怒らないで叱^{しか}るべし

● 教えざるの罪

3 私心を去って、誠実に自己の任務を果たすべし

4 操艦は見取り稽古

○ 見た目に派手な操艦よりも、淡々とした枯れた（いつ出港したのか、いつ入港したのか判らない）操艦

5 訓練と安全は、緊張とリズムとで両立

◇ 緊張：ex. 夜間無灯火単縦陣 3 0 0 yd 2 4 kt で蛇行運動訓練^{だこう}

◇ リズム：ex. 訓練 2 箇月と休養 2 週間

ex. 2 4 kt で帰投するも、

港外で 1 2 kt に減速して低速航行の勘を戻す

☼ 昭和 6 3 . 1 . 1 第 2 1 護衛隊司令 1 佐 大熊 康之

「指揮官心得」

1 目標（所望結果）の確定

2 情報収集のための積極的な伺候^{しこう}

3 意見具申を求め、多数の代替案について科学的に検討

4 オペレーションとトラブルには初動全力

5 通信系の確保と航空機の活用

6 適合性は、可能性に優先

7 経営者の意識と気概

8 クイックリアクションは禁物、方針の頻繁^{ひんばん}な変更なきよう「一呼吸待て」の精神

9 トラブル生起時、最悪事態発展への配慮及び速やかな再発防止措置

10 任務付与時における基本的留意事項の確達

11 保安について些^{いささ}かでも懸念あらば、断じて「止め」

12 リスクを冒^{おか}しても敢行すべき事項か否かの覚めた判断^さ

13 異常事項・要注意事項等に気付いた場合は、迷わず指示

14 専門的判断に偏重するなかれ

15 「現場」「チャート」「時間の計算」は、必ず自ら確認

16 司令部と個艦または艦橋と C I C のダブルチェック

17 インテンションを入れた S I T R E P の励行

指揮官： ～する所存である。 ～させるつもりである。

幕 僚： ～する必要がある。

- 18 多角的観点からの電報起案文推敲^{すいこう}
（一呼吸おいて再読～“試訳おわり発信します”の報告で最終確認）

- 19 迷ったら INFO に、INFO は十分条件

- 20 現場における粘り

「反省メモ要約」

- 1 自ら号令かけたり体育やったりして、自己を日施点検
- 2 部下の実態を診るべし、^み「徒」^{いたづら}に高度な要求を為^なすべからず
- 3 「安全」「保全」「当直体制」「服務事故防止」は、集中、反復及び持続以外に王道なく、これらの教訓は即実行
- 4 海演・検閲等に向かったの「中期的計画」及び教育・訓練における「重点指向」を明示
- 5 隊内競技における事前の雰囲気づくり
- 6 人事に安易な温情は禁物、「決心つかざる時は切る」勇気
- 7 不祥事発生時における男らしい^{いさぎよ}潔さ
- 8 社会における重大ニュースへの自隊としての対応
ex. F F G スターク乗員の葬儀の際、米艦は半旗にしていたが
当隊はそうしていなかった。
- 9 A S W における「対潜航空機」と「デイトム」の重要性
- 10 U n k n o w n の水中目標には、迷わず攻撃
- 11 規約・制令の十分な事前研究と部下への周知徹底
- 12 訓練発射（特に S P A T 使用）時における「デイトムへの設標」及び「捜索用 H S の確保」
- 13 次の陣形（ex. F O R M 2 0 のスペーシング等）変換のための余裕を持った事前検討
- 14 不慣れな作業には、十分な時間的余裕と着実な準備隊形制形
- 15 会合・分離時における確実かつ余裕ある T A C ネットのモニター
- 16 ^{すいま}睡魔を克服し、「電報熟読」及び「在艦橋・在 C I C」
- 17 ^{つと}努めて指揮官会報を開催
- 18 研究会等出席前に、指揮官のピリッとした所見を準備
- 19 広報等において来客が予想される場合、司令護衛艦へ対応要領を具体的に指示

第 5 章 其の他

第 1 節	指揮官道	37
第 2 節	強い指揮官	43
第 3 節	幕僚は考え指揮官は感じる	45
第 4 節	規律厳正・遵法精神の原点	49
第 5 節	人間教育	52
第 6 節	武人の頭と足に戻ろう	54
第 7 節	部隊運用の要諦	57
第 8 節	インド洋方面派遣部隊視察	68
第 9 節	定期昇任者に対し訓示	72

第 1 節 指揮官道

為：米国海軍士官候補生

Naval Commander-ship for U.S. Naval officer candidate

最初に、自己紹介します。

自衛艦隊司令官 海将 牧本信近^{まきもと のぶちか}です。職域は水上艦で、職種は砲術・ミサイルです。私は、1946年8月に熊本市^{くまもと}で生れ、1965年4月に防衛大学校に入校しました。爾来^{じらい}38年間、制服を着用して国旗と自衛艦旗に敬礼できる栄誉を拝受^{はいじゆ}してきました。何と有り難い事だと国家・国民に感謝しています。

First,

I will introduce myself.

I'm Vice Admiral **MAKIMOTO, Nobuchika**, Commander in Chief, Self-Defense Fleet, Japan Maritime Self-Defense Force (JMSDF). I'm a Surface Officer and specialized in Gunnery and Missiles. I was born in Kumamoto prefecture in August 1946, and entered the JAPAN National Defense Academy in April 1965. Since then, for over 38 years, I have enjoyed the privilege and honor to salute the National Flag and Naval Ensign dressed in a Military Uniform. I always appreciate the country and the nation.

第二に、日本海軍^{はっしょう}発祥の歴史を述べます。

宮崎県日向市美々津^{ひゅうがし みみづ}の浜は、AD180年に神日本磐余彦尊^{かむやまといわれひこのみこと}のちの神武天皇^{じんむ}が一族を率い大船団で船出した所として知られています。神武東征の出航地である日向の美々津^{ひむか みみづ}には、内閣総理大臣 [昭和 15. 1. 16 ~ 7. 22] 米内光政^{よないみつまさ} [海軍

兵学校第 29 期：1880－1948] 海軍大将の揮毫^{きごう}による「日本海軍発祥之地^{はっしょうのち}」の大記念碑があります。埴輪^{はにわ}の軍船が上部に付いた大石碑は皇紀二千六百年（昭和 15 年・1940 年）記念宮崎県民奉祝運動^{ほうしゆく}の一環として建立されたものです。
Second,

I will tell you about the history of the birth of the Japanese Navy.

The Mimitsu beach in Hyuga-city Miyazaki prefecture, Kyushu is well known as the place where Prince **Kamuyamato-iwarehiko**, later first Emperor **Jinmu**, set sail for his Eastward expedition commanding his clan and a large convoy in 180 AD. In the Mimitsu beach, there is a large stone monument on which you can find the inscription, “The Birth Place of Japanese Navy” written by former Prime Minister, **Mitsumasa YONAI**, Admiral, Imperial Japanese Navy (1880 to 1948). This stone monument, which is decorated with a clay figure warship on the top, was set up as one of the first commemorating activities of Imperial Era 2600 (1940AD).

第三に、海軍士官教育の意義を述べます。

海軍は行動（戦闘）を生命^{いのち}として国家に献身する組織であります。よって、何処^{どこ}の国の海軍でも、海軍士官候補生に授ける教育は“国難を救う一人の提督を得る^{ため}為の教育”であると、自負しています。かかる高い志^{こころざし}の教育を施^{ほどこ}された海軍士官候補生課程の卒業生は、提督に至^{いた}らずとも、国難に至^{いた}らぬ大事^{だいじ}を收拾^{しゅうしゅう}し善処出来るのであります。

Third,

I will mention about the meaning of education for Naval Officers.

The Navy is an organization that requires the dedication to your country with service involving combat. Consequently, any Navy of the world feels proudly that the education endowed to the naval officer candidate is the education to obtain one Admiral who would save the nation in a time of crisis. Even if all the graduates of NOCS/ROTC who have been given such high moral education are not promoted to the rank of Admiral, they still will be capable of coping with serious situations, and will be able to take the appropriate steps to not allow such situations to become national crisis.

第四に、強い指揮官に成熟する為^{ため}の指揮官道^{しきかんだう}について述べます。

国家の干城^{かんじょう}（Wooden Walls）へと至^{いた}る指揮官道^{しきかんだう}の要諦^{ようてい}は次のとおりです。

Fourth,

I will mention about the Naval commander-ship that is necessary to foster the naval officer with positive minds and inspirational leadership.

The British people called the Royal Navy “Wooden walls” because wooden warships protected the country. The essence of Naval commander-ship that brings you the fine members of “Wooden walls” is as follows:

1 指揮官は華^{はな}となれ

指揮官は常に周^{まわ}りから注視されているので、その一挙手一投足^{いつきょしゅいつとうそく}は周^{まわ}りに大きな影響を及ぼす。よって、明朗闊達^{めいろうかつたつ}晴朗^{せーろ}な指揮官は、往々^{おうおう}にして、自己^{じこ}の才能不足^{おぎな}を補^{あま}って余り有るのである。

1. The Naval Commander should have the air of resplendence like a beautiful flower.

The military commander always becomes the center of attention of subordinates. His every word and deed are closely watched and they exert an influence to those around. Therefore, the commander with a bright, freehearted, cheerful, and pleasant personality frequently compensates for any possible lack in his ability.

2 任務に対する良心から生れる責任感

指揮官は、マキアヴェッリ^{しる} [1469－1527] の記した「天国に行く最も有効な方法は地獄へ行く道を熟知することである」を必至^{ひっし}の覚悟^{かくご}と心得て、胆力錬成^{たんりょくれんせい}・器量拡充^{きりょうかくじゅう}・人格陶冶^{じんかくとうや}の連続修養^なを為さねばならない。

古来^{ゆうきよう}「勇怯^{ひきよう}（勇気と卑怯）の差は小さく、責任感の差は大きい」と言われてきた。ナポレオン [1769－1821] の言う“忠誠と規律”またはクラウゼヴィツ [1780－1831] の説^とく“良心に対する責任から生れる勇気”から生れる本当の意味での責任感こそが、戦士の心を衝き動かすのである。職務や任務に対する良心から生れる責任感^つは、持って生れた性格が教育や訓練によって磨^{みが}かれて確立するものである。

2. The Naval Commander should have the sense of responsibility arising from his conscience to accomplish his duties.

While recognizing MACHIAVELLI's(1) words that, “The most efficient way to the heaven is to know thoroughly the way to the hell”, the Naval commander must continue to improve himself, to build his character, to

expand his ability, and to foster his courage.

Since ancient times, we have heard that the difference between valor and cowardice is small and the difference between each individual's responsibilities is large. The true sense of responsibility is recalled from **NAPOLEON's**(2) words, "Loyalty and Discipline" and from **CLAUSEWITZ's** (3) words, "Courage arises from the responsibility to the conscience". These words struck a singular responsive chord amongst their soldiers. That is, the responsibilities evolving from the conscience to accomplish duties is established by cultivating the inborn personality through education and training.

3 三人寄れば文殊の智慧

文殊菩薩は、剣を持って獅子に乗り、智慧を象徴する菩薩である。

どんなに能力の高い人でも、凡人二人の能力より高い時もあるが、凡人三人の能力を上回る事はない。つまり、独りで遣るよりも皆で遣るほうが、何事も為し得るので、部下・同僚を信頼して仕事を任せることが大切である。

その際、カエサル[BC100－BC44]が書き記した「人間ならば誰にでも全てが見えるわけではない。多くの方は自分が見たいと欲する事しか見ていない。」という、人間の陥り易い弱点に留意する必要がある。

また、自分より能力の高い部下を得た場合、その部下を嫉妬せず有り難いと感謝して、使い熟すべきである。

3. *"Out of the counsel of three comes wisdom." (Two heads are better than one.)*

A highly capable person may sometimes excel over two ordinary men in ability, but never over three.

In other words, there is a better possibility for success when doing something with many people rather than doing it with just one person. This means that trusting your subordinates and colleagues and turning tasks to them is important. However, when we do so, we must always keep in mind the weakness that any one human being possesses, and as **CASER**(4) said, "All people can not see everything, and many of them can see only what they want to see".

Also if you have a subordinate who excels you, you must accept him without any envy as your subordinate and make him work with appreciation.

4 Quality Of Lifeこそ士気の根源

常に戦力を最大に維持しておくことは、平時戦時を問わず、指揮官の義務ですらある。

戦力は、次の要素の積で表される。

$$\begin{aligned} \text{戦力} = & \text{将兵の人数} \times \text{将兵の練度} \times \text{将兵の士気} \\ & \times \text{装備の数量} \times \text{装備の性能} \\ & \times \text{機動力} \times \text{輸送力} \\ & \times \text{整備力} \times \text{補給力} \end{aligned}$$

これらの要素の中で、“将兵の士気”ほど振幅変動の過敏なものはない。よって、指揮官は、士気高揚、士気確認及び士気回復に、十分の意を払い工夫しなければならない。優れた指揮官が、Force-Multiplier（戦力増殖者）と呼ばれる所以でもある。

そして、平時戦時を問わず、士気の根源の一つに指揮官の人間観とも相俟った Quality Of Life（上質な生活＝予定のたつ生活）がある。部下の公的生活・私的生活を上質なものと為すべく、政府の予算措置の必要なものや部隊の創意工夫で出来るもの等、各種の施策が実行されているが、少なくとも、部下とその家族をして、海軍の職務に関する不安がないようにしなければならない。

4. *Quality of Life is the basic foundation for the Navy morale.*

To maintain the maximum war fighting capability at all times is the obligation asked of any commander, either in peace or during war.

Overall war fighting capability depends on the following factors :

Number of service members

Force training level

Morale of Officers and Soldiers

Numerical quantity of military equipment

Quality and capability of military equipment

Mobility

Transportation capability

Maintenance capability

Logistic capability

Among these factors, nothing is more sensitive than the morale of officers and soldiers. Commanders must always pay attention and make every effort to raise and maintain high morale. That is the reason why the superior military commander is often called as a “Force-Multiplier”.

Also, regardless of whether in peace or wartime, one of the fundamental factors of good morale is the Quality of Life. Combined with the commander’s personality, a good commander must continuously improve both the official and private lives of subordinates, and he must devise many ingenious methods, including budgetary, to implement Quality of Life initiatives. At the very least, the commander should try to not make his subordinates and their families uneasy.

5 窮^{きゆう}したら笑え

通常は心／頭／脳が体を支配しているが、体が心／頭／脳に重大影響を及ぼすことがある。それは、切羽詰^{せつば}まって窮^{きゆう}した時でも、笑うという体の動きによって頬^ほの血行が良くなり快感が湧^わき、呪縛^{じゅばく}された心／頭／脳が解放されることである。そして、心／頭／脳に余裕が生じ、また別の道^{ひら}が拓けてくる。

5. *When you feel stranded, you should continue to smile.*

Usually, the body is controlled by the heart, mind, and brain. But sometimes, the body gives large influence over heart, mind, and brain. This means that the body movement trying to keep a smile when you are pressured and feeling stranded improves the circulation of blood, and inspires the feelings of pleasure, clearing up the bounded heart, mind, and brain. Your body will lead your heart, mind, and brain to be more relaxed and you will find a new way and a clear direction.

最後に、諸官の輝かしい前途^{ことほ}を言祝ぎたい。

諸官は米国海軍の未来であり希望であります。孫子 [BC 500頃]^{いわ}曰く「敵を知^{おのれ}り己^{おのれ}を知らば百戦して殆^{あや}うからず」と。

諸官の武運長久^{ぶうんちようきゆう}を祈る！

Lastly,

I would like to send you congratulatory words.

You are the hope and future of the United States Navy. SUN-Tzu(5) says,“If you know your enemy and know yourself, you need not fear the results of hundred of battles”.

I pray for your continued success in war !

< cf >

(1) MACHIAVELLI [1469－1527]

(2) NAPOLEON [1769－1821]

(3) CLAUSEWITZ [1780－1831]

(4) CASER [100BC－44BC]

(5) SUN-Tzu [about 500BC]

第 2 節 強い指揮官

為：防衛大学校本科学生

第 3 8 代自衛艦隊司令官、牧本海将です。Commander IN Chief, Grand Fleet としてインド洋方面派遣部隊を直率^{ちよくそつ}する指揮官でもあります。防衛大学校入校以来、学生は 9 課程・累計 9 年間であり、護衛艦あきづき砲術士を振出しに自衛艦隊司令官は 2 3 番目の配置であり、引越しは現在 2 0 回目です。

私は、1 9 4 6 年 8 月に熊本市で生れ、1 9 6 5 年 4 月に防衛大学校第 1 3 期生として入校しました。爾来^{じらい} 3 9 年間、制服を着用して国旗と自衛艦旗に敬礼できる栄誉を拝受してきました。何と有り難い事かと国家・国民に感謝しています。

ちなみに、私の校友会活動は短艇委員会と語学部中国語班に所属しました。3 学年の時は全日本カッターレースで 8 番を漕^こいで初優勝し、4 学年の時は全日本カッターレースで 1 2 番を漕^こいで連続優勝しました。つまり、勝ち組です。

自衛艦隊は、創設五十周年を迎え、兵員 2 3 0 0 0 名（海上自衛隊 5 万名）・艦艇 8 0 隻 2 9 万^{トン} 屯（海上自衛隊 1 4 2 隻 4 0 万^{トン} 屯 <cf>日露戦争開戦時の日本総人口 4 6 0 0 万人・海軍艦船 2 8 万^{トン} 屯）・航空機 2 1 0 機（海上自衛隊 3 1 2 機）・車輛 8 8 0 台を擁^{よう}する機動海上作戦部隊です。自衛艦隊の御艦^{おふね}と飛行機の値段総計は 4.7 兆円です。「国民の皆様から御預^{おあず}かりした艦艇・航空機・車輛を、部下兵員をして効果的に運用させることにより、我が国の平和の維持及び国民の生命財産の保護のみならず、国際社会の安定確保・平和維持の一翼^{ささ}を支え、我が国の国益と国家の大事^{こた}に応える」ことが、自衛艦隊司令官の仕事です。

自衛艦隊は、2001年11月からインド洋方面支援作戦に艦艇延べ約40隻・乗員約7000名を派遣しています。派遣艦艇は、補給艦1隻と護衛艦2隻で、現地交替します。派遣期間は、出国から帰国まで6ヶ月（冬場）～5ヶ月（夏場）です。日本から北アラビア海まで約3週間かかります。

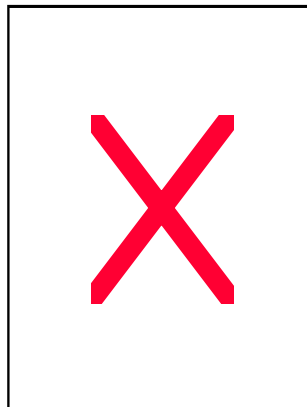
ちなみに、イージス護衛艦が18kt（時速33km）で1日走ると、燃料代だけで約370万円です。

さて、自衛隊の部隊は、その大小を問わず、指揮官と幕僚と部下隊員とで構成されます。作戦にしろ訓練にしろ業務にしろ、**仕事に成功する^{ため}には“幕僚は考え指揮官は感じる”**ことが大切です。特に、戦場において指揮官は、人間の野生部分を発揮して全身全霊で感じなければなりません。幕僚は考え、指揮官は感じるのです。**その^{ため}にも指揮官には、実学に裏付けられた知識、経験に裏付けられた見識及び人格に裏付けられた^{たんしき}胆識が必要です。**これまで工夫・アイデア・改善といった小さな現場学習を積重ねることによって^{つちか}培われ体得した知識・見識・^{たんしき}胆識が脳細胞に十分に蓄積されますと、潜在意識下で融合・相関され、必要な時に戦闘空間／任務環境の刺激によって顕在化し、必要な時に適正な判決が潜在意識の底から浮かび上がって来て、指揮官の必要とするナニカとして感じ取ることが出来て、作戦や訓練や業務を成功に導きます。これが**“感じる”**と言う事です。

よって、21世紀の自衛隊を担^{にな}う諸君は、この小原台の徳育・知育・体育の学習により脳細胞に知識・見識・^{たんしき}胆識を蓄積して下さい。この日々の精進^{しょうじん}は、諸君が30歳から40歳になる頃、『指揮官は感じる』ことを実感し体験させます。それが強い指揮官であり国家の大事^{こた}に応え得る指揮官です。諸君はこういう指揮官に^な成るのです。

学生諸君の^{はつぷん}発奮を期待して、私のショーツピーチを終わります。

防大13期



牧本学生

第3節 幕僚は考え指揮官は感じる

為：中級士官

1 知的好奇心を旺盛に^{おうせい}

ギリシア語には、英語の love に相当する単語が三つある。それは、フィロス（知的好奇心）、エロス（相手に価値があるから好きになる男女の愛）及びアガペー（相手に価値がなくとも好きになる無償の愛 ex. 吾が父母子 ex. 我が祖国）と言う。イエス【ヘブライ語“イエホーシュア〔訳；ヤハウエ〈天主の御名・（聖四字）Y H W H：the Being の意〉は救いなり〕／ヨシュア”のギリシア語形】、キリスト【ヘブライ語“マシーアハ〔訳；（祝福の香）油を注がれし者＝イスラエルを救うために天主が遣わすべき将来のイスラエル王を指す〕”のギリシア語訳‘クリストス’ christos】[BC 4－AD30；ナザレの大工ヨセフとその許婚者マリアの長男としてベツレヘムで生れた。七人兄妹の長男なので父の死後19歳で大工となる。30歳ころから伝道活動始める。]の説く主題^{テーマ}がアガペー〔自分を愛する様に汝の隣り人を愛せよ〕であり、司令官の説く主題^{テーマ}がフィロスである。

< 註 > ユダヤ教の聖典『タナハ』はヘブライ語で、キリスト教の旧約聖書・新約聖書『バイブル』はギリシア語で、イスラム教の聖典『クルラン』はアラビア語で記述してある。

< 註 > 『論語』によると、孔子^{こうし}〔姓名は孔丘という BC551.10.21－BC479.4.11〕は弟子の樊遲^{はんち}が仁を問うと「人を愛す」と答えた。

知的好奇心とは、「世〔過去・現在・未来〕界〔東西南北上下〕はどう成っているのか？」という未知^{ことごと}の事柄に対する興味疑問から始まる。人間にとって、時間と空間との制約の中で、系統的効率的広範囲に“世界を知る”手段として書物に如くは無し！読書によって、書中で疑似体験しながら思索を凝らすと、知識を相関して智慧^{ちゑ}に融合する炯眼^{けいがん}の持ち主になることが出来る。読書などによる“世界を知る”過程において重要な事は、「自分自身でなく自分以外の他人・万物・環境に対する想像力を豊かにすること」である。このことは、‘他人への思い遣り^や’、‘物事の本質を見抜く洞察力’または‘E E I（情報主要素）から健全な軍事判決’に通ずる。

知的好奇心はまた、外界の価値・真理・危機を感じ取る感受性を育て高めてくれる。感受性が低いと、「見れども観えず、聞けども聴けず」の状態に陥^{おちい}って、自己の認識する世界を狭くし、有識者の講話・著書の全部を感得出来ない。勿体ない^{もったい}ことである。例えば、路傍に咲く堇^{すみれ}が在^あるとする。二十代は

眼で見ても気付かない。三十代は眼で見たら「美しいなあ」と感じる。四十代は心で観たら「美しく咲いてくれて有り難う」と感謝する。五十代は心で観て「堇も吾も宇宙に育まれた一欠片の生命である」と謙虚に“宇宙の一部一欠片”を体感する。

知的好奇心を旺盛にする事は、想像力を豊かにすること及び感受性を高めることへの端緒となる。豊潤な想像力と繊細な感受性を有してこそ、21世紀の海上自衛隊に奉職して御役に立てる指揮官・幕僚に大成できるのだ。

2 タフな幕僚

米国ケネディ大統領の側近だったシオドア・ソレンセンは、その著書『ケネディの道』で、「幕僚の仕事は、問題を詳細に論じ、利害の衝突を明確にし、大統領に報告し助言し補佐することによって、大統領が最も重大な決定を下せる余裕を常に残しておく事だった。」と述べている。

幕僚は、情勢及び行動方針を見積り、彼我行動方針を分析し、我が行動方針を比較し、指揮官が判断し決断できるように、資料を提供する。

S U W（対水上戦）を例にとって説明すると、

- I 各種情報を分析して「敵が射程内に入った」と見積もった。
- II 各種状況を組合わせ「今こそ、攻撃すべし」と判断した。
- III 情勢判断とR O Eから「攻撃命令を発令せよ」と決断した。

Iは幕僚の仕事であり、IIIは指揮官の仕事である。ここまでは諸官承知のとおりである。十分に認識してもらいたいのは、IIが指揮官だけの仕事でなく、IIが幕僚の仕事であり指揮官の仕事であることである。幕僚の判断としてのIIが提供されて、初めて指揮官は自分なりにIIの判断が出来るのである。幕僚は、このIIレベルを提供出来てこそ、指揮官の決断に寄与したことになる。

中級士官諸官は、強い指揮官に成るため、まず、タフな幕僚を目指すと宜しい。

☆☆☆海外派遣実動部隊の士気昂揚☆☆☆

- ① ‘任務が意義あるもの’と受けとめられる。
- ② ‘何故ここに居るか’が理解出来る。
- ③ ‘遣るべき仕事を遣れ’と命令される。
- ④ 平素重ねている訓練内容と前線に於ける任務とが一致する。
- × お門違いの仕事
- ⑤ ‘故国の家族の支え’と‘故国の国民の励まし’が有る。

3 強い指揮官

自衛隊の部隊は、その大小を問わず、指揮官と幕僚と部下隊員とで構成されている。作戦にしろ訓練にしろ業務にしろ、仕事に成功する為には“幕僚は考え指揮官は感じる”ことが大切である。その為にも指揮官には、実学に裏付けられた知識、経験に裏付けられた見識及び人格に裏付けられた胆識^{たんしき}が必要となる。これらの知識・見識・胆識^{たんしき}が脳細胞に十分に蓄積されると、潜在意識下で融合・相関され、必要な時に戦闘空間／任務環境の刺激によって顕在化し、必要な時に適正な判決が潜在意識の底から浮かび上がって来て、作戦や訓練や業務を成功に導く。これが“感じる”と言う事だ。

通常は‘知ってる事と出来る事とは違う’のであるが、知ってる事と出来る事とを同一にしないと、御役に立てない。何事を為す^なにしても、まず意識しなくてはならないが、そこに止まる^{とど}べきではない。もう一步進めて、意識したという事も捨てて行かなければならない。意識して遣^やってるうちは、まだ本物ではない。そこで、鍛錬や勉強を専心集中継続すると、意識せぬ時、注意を向けていない時に、意識そのものが働いてくる。自分の心でないと思うものが、自分の自覚以外のところで働いていて、それがどうかして自分の心の中に現れてくるのである。つまり必要な際は、体が自然に動いてくれ、頭の中に自然に判決が浮かぶ。こうなったら知ってる事と出来る事とが同一になって、もう本物であり、国家の御役に立つことが出来るのである。

よって、21世紀の自衛隊を担^{にな}う中級士官は、実務を通じた徳育・知育・体育の学習により脳細胞に知識・見識・胆識^{たんしき}を蓄積すべし。この日々の精進^{しょうじん}は、諸官が30歳から40歳になる頃、「指揮官は感じる」ことを実感し体験させる。それが強い指揮官であり国家の大事^{こた}に^{こた}え得る指揮官である。諸官はこういう指揮官に成るんだ！本物の達人^{しょうじん}たるべく、精進あるべし。

中級士官諸官の発奮^{はつぶん}を期待し、諸官の武運長久^{ぶうんちようきゅう}を祈念する

☆☆☆ 勝者は敗因^ひを秘め 敗者は勝因^{ぞう}を蔵す ☆☆☆

by小室直樹^{こむろなおき}著『日本の敗因』2000年 講談社

1. 歴史の研究

(1) 歴史から教訓を導出する。

ビスマルク^{いわ}曰く「賢者は他人の体験から学ぶ」と。

(2) if [条件の制御；原因らしき諸変数のうち、一つを動かす。] の思考実験による勝者敗因・敗者勝因を分析する。

2. 日本の官僚（軍事官僚も含む）の欠陥

(1) アメリカ世論不感症

アメリカは世論の国である事及びアメリカ大統領の選挙公約が重大視される事に思いが至らなかった。

(2) 国際法活用能力の不足

ex. 大東亜戦争の宣戦布告を昭和16年12月8日（日）1300 i グルー駐日米国大使に東京の外務省で通告する発想なし。

ex. 装備品等を接收した戦勝国に装備品等の管理責任があるにもか^かわらず、支那大陸で終戦を迎えた大日本帝国陸軍部隊の装備品等、特に化学兵器の位置づけに不備あり。

(3) 戦略的謀略の欠如

ex. 情報操作

(4) 失敗不問^{ふもん}の無責任法則

ex. 大東亜戦争宣戦布告の手交に係る在米日本大使館参事官等の外務省訓令違反

ex. 海軍丙^{へい}事件（聯合艦隊司令部参謀長福留^{とら}少将の二式大艇がセブ島東岸に不時着した際、原住民に囚^{とら}われて「Z作戦計画」が盗撮された。）

(5) 頭脳明晰^{めいせき}石頭

頭が固いとは、想像力に欠けることなり。

(6) 敵を知る努力の欠如及び敵を自己同類^{はんちゅう}の範疇^{とら}で捉える独善

(7) 腐朽^{ふきゅう}した軍事官僚には、

ア 戦争思想がないので、戦争設計がなく、最良選択も不可となり、戦争計画も杜撰^{ずさん}となる。

ex. 技術者養成計画

ex. 操縦士養成計画

イ リスクコントロール 危機管理能力なし。

ウ 資源の最適配分の戦略なし。

エ 戦争哲学（戦争目的を把握して何を為すべきかを高次元で考える事）がないので、目的を見失って目的と手段とが逆転して、陸軍省・海軍省の省益が優先された。

(8) “国は納税者のものなり”との視点欠如

ex. 戦争の目的は勝利であり、その勝利は納税者の利益を守ることに直結している。

ex. 部隊の一般公開の意義とは、納税の義務を果たしている国民は税金が国民の為に使われているかどうかを観る権利を有するので、これに^{こた}える事にある。

(9) システマティック（適材適所・人材育成・労休管理）に人を使わないので有事も年功序列人事

ex. 人間五十歳を過ぎればどんな仕事でも若すぎると言う事は無いので、勝てる司令官（直感的洞察力に優れた知識・見識・肝識の軍人）を^{ばってき}抜擢することなし。

(10) ^{がんめいころう}頑迷固陋に^{ぜんれいとうしゅう}前例踏襲

政治家や軍人は不確実な未来に向かって歩を進め、自分で判断し決断して、自分で結果責任を^お負わねばならない。ところが官僚は、過去の慣例・前例のとおり^や遣っていれば、失敗しても結果責任を^お負わなくていい。つまり官僚は^{へんさち}偏差値秀才で^{ことた}事足りるのだ。

マックス・ウェーバー^{いわ}曰く「最良の役人は最悪の政治家だ。」と。

政治家や軍人が役人化するのが一番^{こわ}怖い！

ex. 敵の出方によって私の戦法を柔軟に適合させていこうとする着意なし。

ex. 補給が出来なければ戦闘を一時停止するという健全なる軍事判断なし。

ex. 艦隊保全主義の潜入による「軍艦が惜しい！」という根性が、決戦において損害を省みず戦果^な拡大を^な為す絶好の機会を失わせた。

第4節 規律厳正・遵法精神の原点

自衛隊は、何故、規律厳正と遵法精神とを死活的に重視しなければならないのか。その原点をけして失念してはならない。

1 人間の行為の正し手

by ^{しおのななみ}塩野七生著『ローマ人への20の質問』文春新書2000年

人間は、行為の正し手なしには社会が成り立たないという生き物でもある。それを何に求めたか、古代の三民族は次のとおりである。

(1) ユダヤ人

人間の行為の正し手を宗教に求めた。しかし、これには、宗教を共にせず信仰しない人との間では通用しないという限界がある。

(2) ギリシア人

人間の行為の正し手を哲学に求めた。しかし、これには、知的関心が無く哲学を理解出来ない人との間では通用しないという限界がある。

<cf> 感性論哲学 by 創始者^{よしむらしふう}吉村思風

[1942ー ; 思風庵哲学研究所長]

宇宙は現在実際に生成・崩壊しているので、宇宙の本質と理念つまり真実^{あら}は変化である。凡ゆるモノを固定化するのは理性であり、変化を要求するのは感性である。人間が生きるという事は変化を常に作り出す事であるので、人間の本質は理性でなく感性である。

“学問＝科学＋哲学”であり“現実＝事実＋意味”である。

Π 科学[サイエンス]とは、実証的・発見的な学問であり、認識欲^{こた}に応えるため、現実の中の事実を対象とし、理論[セオリー]を方法にして、現実の世界に存在する物事の構造と法則を真理として探求する学問である。

* 事実には、未来がなく、過去と現在しかない。

* 事実は変化しないので、真理は一つである。

* 理論とは、真理は一つという考え方の中で使われる方法論である。
しかし、宇宙は対の構造になっているし、社会は多様性から成り立っているので、真理は一つという考え方では複雑系の現実に対応しきることが出来ない。

Ω 哲学[フィロソフィ]とは、論証的・創造的な学問であり、幸福欲^{こた}に応えるため、現実の中の意味を対象とし、論理[ロジック]を方法にして、現実の世界に存在する物事の本質と理念を真実として探求する学問である。

* 事実に拘束されず、事実に狭められず、事実に支配されず、未来を見て理想を語るべし。

* 論理とは、理論よりも高次元であり、物事の解決の仕方である。

(3) ローマ人

人間の行為の正し手を法律に求めた。そして、法律は、宗教を共にしな

くても知的関心が無くとも、価値観を共有しない人との間でも効力を発揮できる普遍的妥当性を有している。いや、価値観を共有しない多種多様な人間だからこそ、法律は共に生きていくのに必要となるルールにすぎない。

2 先進近代国家とは法治国家

我が国“日本”が先進国と諸外国に認められているのは、経済大国だからでなく、法治国家だからである。法の執行が万人に平等である法治国家には、有事といえども、超法規行動なんぞ有り得ない！

よって、海上自衛隊の“精強・即応”も法令の範囲内の精強・即応であって、法令を逸脱した精強・即応は許されないと知るべし。

そこで、作戦や業務を遂行する際、国際法や諸法令に基づく我が行動の正当性と相手の不法性とを立証するため、証拠となる記録・ビデオ・写真・第三者証言など及びリーガルアドバイザー（legal adviser）を活用する着意を持つとともに、その正当性を主張できる腹案を準備しておくことを忘れてはならない。

3 国民の信頼による負託

国家防衛を負託されている自衛隊員は、国民の信頼に^{こた}える義務がある。服務に係る規律違反に限って言えば、「これぐらいは」「多数隊員の一人ぐらいは」「過酷な勤務だから」「業務が超過してるから」「処遇が低いから」等々は世間（国民の目による評価）から国民の信頼に^{そむ}く言い訳としか採られない。

軍隊の命脈は軍紀にあり、外地では特に注意を要する。[^{ベクソニョップ}白善燁將軍]

防衛出動が出来るとの一点に集約した我が国唯一の武力集団“自衛隊”の構成員の基本的心得は、規律厳正と遵法精神である。よって、規律を厳正に保つことは、武力集団として少々^{おおげさ}大袈裟なくらいで^{ちやうど}丁度よい。また、“国を守る”とは“現体制を守る”ことであり、“現体制を守る”とは“現在の法体制と現行法令を守る”ことであるので、^{じゅんぽう}遵法精神は^{おうせい}旺盛であるべし。

ところが^{そこ}近頃、国民の生命・財産を害ねているのが散見されるとは、何事であるか！ 交通法令等違反の問題に限らず、人生に受け身の態度ばかり^し染み込んで将来予測と想像力に欠ける若者を^ど何う適確に指導するのか？ プライベート重視の時代に隊員個人のプライベートに^ど何う適正に介入するのか？ その方策の一つは、Quality Of Life(上質な生活＝予定のたつ生活)を実践し、隊員の公的生活・私的生活を上質なものと^な為しつつ、隊員個人の人生計画を作成させ、

当事者意識と仲間意識とを高揚し、此れに従って指導することである。

また、弾丸という鉄の塊^{かたまり}を艦^{ふね}の外に打ち出す“射撃”は極めて重大かつ危険な仕事であるので、教範類・規則類・躰事項^{しつけ}などの射撃に関する掟^{おきて}を射撃規律と称して、効率と安全とを二重三重に保障しているにも拘らず、規律風紀の根源と呼ばれる射撃分隊＝第1分隊で射界外射撃や曳的機射撃が散見されるとは、何事であるか！射撃の問題に限らず、規律の乱れは使命感不足の表れである。勇氣とは、恐れを知らながらも、為すべきことを為すことである。海上自衛隊の存立意義^{そんりつ}から説き起こして、当事者意識と仲間意識とを高揚し、使命感を醸成^{じょうせいとうてつ}透徹させるべし。

いづれにしても、繰返し繰返し善導^{ぜんどう}を継続することが肝要である。

第5節 人間教育

ヒトは、獣^{けもの}として生れ、躰^{しつけ}られ学習し教育によって人間と成る。[青炎]

1 脳の発達 by 月刊誌『諸君』2003年8月号の「家庭が脳を育てる」

東京女子大学 林道義^{はやしみちよし}教授

こども心身医療研究所 富田和巳^{とみたかずみ}所長

ヒトの脳（約1500g）は、この三万年ほど構造に変化なく、140億個の細胞を有し1個の細胞に500本の神経〔総計70兆本〕が連結しているので、神経細胞から成り立っているとも言う。この神経細胞が枝分かれし相互接続しネットワーク化することを脳の発達と言ひ、心理学上の人格の発達と密接に関係している。

5歳頃までは、安楽平穏な環境下（⇨不機嫌で怖い顔の母親に接する）の秩序正しい生活（⇨深夜族の親に付合わされる・ジェンダーフリー式教育）及び質の異なる多種多様な刺激（⇨抱っこされない・優しく語りかけられない・あやされない）が、脳の健全な発達を^{うなが}促す。

心は知情意で構成される。知識（⇨教育ビデオのみ）・情緒（⇨双方向的伝授たる絵本を読んで貰^{もら}えない）・意欲（⇨父親から高い高い！や肩車をして貰^{もら}えない）がバランスよく発達していくことが、脳の健全な発達に繋がる。お受験が大事とばかり知を与え過ぎると、情と意の不足する些^{いささ}か心の歪^{ゆが}んだ子供に成りかねない。人格の基盤となる自我の完成は8歳頃である。

“親を^み観て子は育つ”と言われていとおおり、母性的愛情を多く受けていない子が他者に対して攻撃的になり、父性的愛情が欠如する子は無気力に成

りがちである。

2 遣^やる気 by 日刊紙『産経新聞』平成15年9月特集

島根医科大学 小林祥泰教授

富山医科薬科大学 西条寿夫教授

学習・挑戦・創造を支える遣^やる気は、人間を進化させてきた精神活動と肉体行動を生み出してきた原動力ともいえる。遣^やる気は、何にでも興味を持って前向きに考え行動すること及び体の健康を保つことで維持される。

3 笑いの効用 by 日刊紙『産経新聞』平成15年9月特集

中央群馬脳神経外科病院 中島英雄院長

笑いは、脳の血管を開き血流を増加させ、脳を活性化する。

4 ゲーム脳と若年性健忘症

by 月刊誌『PRESIDENT』2003. 8. 18

河野臨床医学研究所^{つきやまたかし}築山節理事長

by 日刊紙『讀賣新聞』平成16. 6. 22夕刊

日本大学文理学部森昭雄教授

東邦大学医学部有田秀穂教授

ヒトの脳は、多くの人に交わり多くの事に接すると、その経験が刺激となって活性化し発達する。しかし、幼少時から便利な道具（テレビ・電卓・携帯電話など）に頼って暮らして居ると、脳を育てる刺激が乏しく、思考力や記憶力は発達しない。そして、運動^{あま}を余りせずパソコンやテレビゲームに長時間興じると、創造力や理性など人間らしさに関係する‘脳の前頭分野の機能’及び脳^{かくせい}を覚醒するほか快不快体験に過剰に反応しない平常心を生み出す‘セロトニン神経の活動’を低下させる。この状態をゲーム脳と呼び、脳の活動を示すβ波^{ほとん}が殆ど出ない。つまり、若年性健忘症や自己抑制不可とは脳の発達未熟・機能低下なので、きちんと音読・書文によるリハビリをすれば1～3年で^{なお}治る。

5 海上自衛隊

最近生起する海上自衛隊の人的起因の問題（事故・規律違反・失敗・過誤）に、従前と異なる問題（放火・セクハラ・官僚化）^{ぜんぞう}が漸増している。その原因の一つに、知力に障害なくとも、階級の如何^{いかん}を問わず、当該隊員の情緒・意欲に関する部分の脳の発達未熟／機能低下ではなかろうか？ また、海上自衛隊隊員の“予定は未定にして決定に非ず”を常態とする^{せつな}刹那主義・^そ其の日暮らし・無計画主義の潜在意識も、悪影響を与えているのではなかろうか？

よって、隊員の無計画主義の潜在意識を変革させるため Quality Of Life(上質な生活＝予定のたつ生活)も追求すること並びに当該隊員の情と意に関する脳の発達を促^{うなが}すため指定図書の音読と強制的音読歩行たる軍歌演習及び人生計画の作成を課すことを、各級指揮官は人間教育の一環として実践し、自衛艦隊の精強維持に貢献して貰^{もら}いたい。

第6節 武人の頭と足に戻ろう

尽忠報国^{じんちゅうほうこく}は諸官の人生を輝かせるので、生れて来た事を後悔しない為にも、武人の頭と足に戻るべく精進すべし。

1 幹部

幹部は、部隊の生死^{いきしに}を左右するので、歴史上の英雄たちの修羅場^{しゅらば}を歴史書や戦史書により、自分の決心を自問自答しつつ第一人称で考える頭上シミュレーションで、疑似体験する努力を積重ね、胆力^ねを錬るべし。

× 二人部屋の防衛大学校出身幹部

防衛大学校学生隊の八人部屋（四学年×2・三学年×2・二学年×2・一学年×2）では、上級生は下級生の眼を意識することで自己抑制しリーダーシップを実地に学び、下級生は立派な上級生を直^{じか}に観^みてフォロワーシップを体験する。

しかるに、防衛大学校学生隊の二人部屋（同学年×2）では、上級生は下級生の眼を意識しないことで自己抑制せずリーダーシップを実地に学ぶ機会を得ず、下級生は立派な上級生を直^{じか}に観^みずフォロワーシップを体験しない。同じ部屋に上級生と下級生が生活しないので、上級生は下級生を弟の如く可愛がらず、下級生は上級生を兄^{こと}の如く敬愛しない。

× 四人部屋の幹部候補生学校卒幹部

連帯責任の経験が少なく、期生会未結成もある程同期生の結束が弱い。

2 海曹

海曹は、組織前線の管理者であるので、その結果責任を逃れる事が出来ないものと知り、当事者意識を高揚して術科力^ねを錬るべし。

× ゲーム脳の海曹

幼少時から便利な道具（テレビ・電卓・携帯電話など）に頼って暮らして居ると、脳を育てる刺激が乏しく、思考力や記憶力は発達しない。そして、運動^{あま}を余りせずパソコンやテレビゲームに長時間興じると、創

造力や理性など人間らしさに関係する‘脳の前頭分野の機能’及び脳を覚醒^{かくせい}するほか快不快体験に過剰に反応しない平常心を生み出す‘セロトニン神経の活動’を低下させる。この状態をゲーム脳と呼び、脳の活動を示すβ波がアルツハイマー患者の如く殆ど^{ほとんど}出ない。よって、意思疎通能力や自己表現能力に欠け、若年性健忘症^{おちい}に陥る恐れも有る。

★海自における最近の人的起因問題（事故・規律違反・失敗・過誤）

☆海上自衛隊の具体的対策

情と意に関する脳の発達を促すりハビリテーションとして、指定図書^{しじやうとくしょ}の音読^{おんよみ}を課し強制的音読歩行たる軍歌演習^{ぐんかえんしゅ}を遣る。

3 海 士

海士は、海上自衛隊に志願して入隊した職業人であるので、まず職業人としての義務^{ぎむ}を知り、仲間意識を高揚して何事にも遣る気で当る^{あた}べし。

波頭亮^{はとうりやう}著『若者のリアル』日本実業出版社によると、「……現代の若者は、今を楽に過ごそうとしている。自分でコツコツと努力することが出来ないばかりか、地道な姿勢や生き方自体を本音で否定している。文句を言われず適当に遣れて、特殊な技術や知識を覚える必要もなく、時間的拘束もルーズなのがウザクなくて良い。夜を失った若者達は、孤独で内省的な時間を持てず、社会とも自己とも対峙^{たいじ}しない。希薄な人間関係の中で無気力に漂泊しているだけなのだ。……」と、現代の若者気質^{かたぎ}を分析している。

しかし、こういう若者でも、海上自衛隊の各教育隊・各術科学校を終了して部隊OJTを経ると、見違える様に立派な若年水兵^{ヤングセイラー}に生まれ変わる。

× 足の重心位置の後退した海士

裸足^{はだし}／草履^{ぞうり}／下駄^{げだ}でなく、小さめ（足の指が動かない！）又は大きめ（足が滑る！）の靴で生活させられる幼児は、爪先^{つまさき}に力を入れ足の指を使って歩く事を学習出来ないので、足の指が動物的に発達しない。こうした幼児時代を送った子供は、足の指の一部が浮いて力の入らない“浮き足”や“偏平足”や“外反拇指”に成り易いと言う。

すると、足の重心位置は爪先側^{つまさき}から踵側^{かかと}に後退し、立った姿勢が不安定と成って転倒し易くなる。

★海自における最近の人身事故（ラッタル滑落・歩行中転倒）

☆海上自衛隊の具体的対策

足指の発達を促すりハビリテーションとして、両足指でタオルを手繰^{たぐ}

り寄せる練習や素足の草履歩行を、昼休み時間に遣らせる。

@自殺すると損するゾ！

河合隼雄・中沢新一共著『仏教が好き！』2003年 朝日新聞社

キリスト教では、自殺は「生命を下さった天主に対し悪を働く」ことであるので、自殺は禁止されている。

仏教では、自殺は悪でなく、「自殺すると損するので其んな事したら駄目だよ」という認識である。カルマとは、過去から未来へと連続作用する因果応報律に従う人間の行為のことである。冥加とは、生前に積んでおいた善の蓄積のことであり、輪廻転生律に従い、次の生誕に向かって辿っていく軌道を決定する力を有する。

貴方の身体は、137億年前の宇宙誕生で創られた素粒子から成る原子の輪廻転生によって造られている。量子論の思考法は曼荼羅（仏陀や菩薩を一定の方式に配置して悟りの世界を表わした図）のマトリックス（総体として変化していくもの）に在る。

貴方の人生は、カルマが寄り集まって出来た自律体である。

死の瞬間には今までの人生のカルマを造っていた色々な結び目が解け、本の短い時間だけど、誰もが安楽浄土を見ろという素晴らしい体験をする。だから、死んだら本の短い時間だけ楽に成る。しかし、直ちに冥加が働き出し、冥加の足りない人間の死後の意識は極楽に止まり得ず、彼れよ彼れよと次の軌道に運ばれて行って終い、真の楽〔安心＝英語ハピネス・仏語ボヌール（善き時）〕を取逃がすことと成る。

よって、人生が苦しいからって自殺すると、苦しみの根本原因が消滅出来ないままだから、また本人のカルマが再結集して来て、前よりも尚々苦しみの多い生命と成って生れてくる可能性が大である。つまり、自殺すると、一時的に楽であるけど、其の後で大変な苦しみを背負ってしまうので、大いに損するのだ。

お釈迦様が紀元前484年2月15日に80歳で涅槃に入られる際、最後の言葉は「此の世は美しい」であった。「此の世は美しい」という真実を、自分の心でしみじみと理解する為にも、苦しくとも此の世で生きることである。食物連鎖を抜け出た御蔭で考える事の出来る余暇が与えられた人間には、自分の心を制御することによって、大楽を実現出来る能力が有る。

第 7 節 部隊運用の要諦

1	ドクトリンの確立	57
2	必勝の術策	58
3	方針の明示	58
4	組織の構成	63
5	綿密な計画	63
6	知的好奇心と野生的勘	63
7	大胆な実行	65
8	周密な報告	66
9	教訓の抽出	66
10	知行合一	66

戦争とは、位置（position）と時間（time）の事業（business）である。よって、それらの処理を如何に効率的に行なうかが要求される。戦争は複雑系であり、複雑系世界の絶えざる変化と予測不可能性という状況下においては、最適化よりも、フィードバックを有する適応が有効である。

戦いに勝つためには、統合（joint）／協同（combined）を重視し、情報優越によって主導（initiative）を取り、C⁴ISRネットワークを活用して作戦速度（op-tempo）で上回り、全般作戦状況図（COP：Common Operational Picture）を維持することである。そして、積極性（aggressive）かつ柔軟性（flexible）な対処、欺瞞（deception）による陽動及び重心攻撃こそが、正に戦いに勝ち残る要訣である。

戦争は、禁欲しながら遣るものでなく、生活しながら遣るものズ。そうでなければ長続きはせぬ。戦争は勝つまで遣るのだ、永くなろうとも。

参 考；『米軍2010年統合構想 JOINT VISION 2010』

『米軍統合ドクトリンの全体概念と主要構成要素

DOCTRINE Capstone and Keystone Primer』

『英国海洋ドクトリン

The fundamentals of BRITISH MARITIME DOCTRINE』

『海上自衛隊基本ドクトリン（幹部学校案）』

小部隊から大部隊までを問わず、それを運用する際の、要諦というか勘所と

いか、肝心な点や重要な点について述べてみたい。

1 ドクトリンの確立

ドクトリン（教義）とは、国家目標を擁護する軍隊の行動の指針となる基本的原則である。それは、政策・戦略と戦術・術科・手順との架け橋であり、部隊運用に係る共通の認識と標準化の基盤を与えるものであり、金科玉条とせず解釈の対象として取り扱って現場指揮官の判断の最適化を支援するものであり、歴史に基礎を置く経験則でもある。

英国の提督ホレイショ・ネルソン [1758－1805] は、戦術信号「近接行動 close action；更に敵に近接して交戦せよ」のように簡潔な指示でよく知られている。簡潔な指示では発簡者の企図が完全に伝わらない事があるものだが、ネルソン艦隊ではそういう事がなかった。それは、ネルソンの部下の指揮官達が、時にはネルソン自身によって修正された『英国海軍ドクトリン（ネルソンによって解釈されたドクトリン）』に完全に習熟していたからである。権限委任の信奉者であったネルソンは、部下の指揮官が自己の知的能力とシーマンシップを活用するとともにネルソンの企図をよく理解して敵の機先を制する機動を行なうことを期待したのである。重要なのは、来るべき戦闘の様相を如何に考えるかについて、ネルソンが部下の指揮官達と討議するために多くの時間と努力を費やし、行動に係る状況認識を共有したことである。その結果として、ネルソンの部下の指揮官達は改めてネルソンの指示を求めること無しに、その目標とする事柄を追求して、独自に行動することが出来た。

指揮官は、正しく決定する能力を持つだけでは、十分とは言えない。彼の部下（指揮官の分身）は、直ちにその決定の意味することを余すこと無しに了解して適切な行動によってこれを確実に実行できなければ、十分とは言えない。十分と言えるためには、指揮官も部下も全ての者が同じ土台の上で考えるように訓練されて考え方を共有していなければならない。指揮官の命令は彼の部下の頭脳の中で同じ思考過程を呼び起こし、指揮官の言葉は彼の部下にとって同じ意味を持つものでなければならない。即ち、指揮官の分身を造って戦場に派遣すること、これが自己同期形成 self-synchronization の意義であり、これを可能にするのがドクトリンの確立である。

婆心ながら付言すると、ドクトリンは、あくまでも基本的原則であって、

金科玉条や不^ふ磨^まの大典でないので、戦いに勝つ（任務達成）ため、状況によっては、ドクトリンを厳守する必要がないのである。

2 必勝の術策

大東亜戦争のインパール作戦において、第31歩兵団長宮崎繁三郎少将は次の様に必勝の術策を説^といている。「……上がそういう枠組を決めてしまったんだから、我々としては、**その土俵の中で最善を尽くす**、それが軍人の宿命だ。そのため、必勝の術策はただ一つ、第一線下級指揮官（小隊長・中隊長）の判断力の向上だ。一瞬のうちに地形を判断し、敵情に応じて適切に対処できるのは第一線下級指揮官しかない。尋常^{じんじょう}な心構えと準備ではとても任務達成できないが、**ごく当たり前前の事を当たり前前に遣^やる**ことが問題を解く鍵だ。屁理屈^{へりくつ}を付けて手を抜くことをせず、正道を踏む。基本的な原則を忘れないで堂々と遣^やることだ。……」と。

自衛隊員服務の宣誓に「……事に臨^{のぞ}んでは危険を顧^{かえり}みず、身をもって責務の完遂に務め、もって国民の負託に応えることを誓います。」とある。

必勝の指揮官への信頼あればこそ、隊員は危険を顧^{かえり}みない事を想^{おも}うべし。

3 方針の明示

同僚・部下による効果的で適切な助力・献身を確保するためには、達成すべき目標とその理由を明確に示さなければならない。そして、上官の意図に沿った指揮官の企図を部下に周知させるために、**付与された任務を完遂するための効果的方針を明示する。**

<例1> 災害派遣「武器使用による火災タンカー船体処分」

の現場部隊指揮官（第2護衛隊群司令）の方針

[平成8. 2. 10（土）2200 i 所在先任指揮官として所要の隊司令・艦長を参集させ警急呼集を発動後2305 i 佐世保出港～11（日）2146 i 佐世保入港；2EL（くらま、47Ed（やまぎり・さわぎり）、はるな〔3EL〕、もちづき〔佐地隊〕]

① 迅速対応・安心供与

貨物油（ジェット燃料・ガソリン）約4000tを搭載したパナマ船籍のタンカーが済州島の東南東で火災を起こし、炎上しながら風潮流により五島列島の方角へ漂流している。

初動全力により、佐世保港外から第4戦速27ktで現場海域に進出するとともに、艦載ヘリコプター（HS）を発艦させて火災タンカ

一の位置・外力等を確認する。

つまり、海上自衛隊の迅速な対応によって、五島列島の島民に安心を供与するのである。

② 汚染防止・環境保全

貨物油は揮発性が高いので海洋汚染の恐れはない。しかし、動力油はA重油なので海洋汚染による二次災害を引起こす。そこで、取寄せた当該タンカー船体図を^{もと}基に、貨物油タンクの水線付近を照準点に、また動力油タンク周辺を射撃禁止帯に定め、現場において「D D Hくらま」・「D D Hはるな」・「D D Aもちづき」の5^{インチ}吋砲による船体処分射撃の立付けを行なう。

つまり、海洋の汚染を防止し、環境保全に寄与するのである。

③ 人道配慮・均衡重視

☞ 海の仲間に対する礼儀として

沈没時／撤収時に登舷礼式で人と船に弔意

火災タンカーは10mの火柱を上げながら五島列島の福江島に近接している。また、乗組員19人は既に救助されているが、韓国人の船長が船内に残り残されて行方不明である。

a 火災タンカーが福江島の福江市などの人口密集地帯近辺に着岸して流出油による陸上大火災等の二次被害が予想される場合、水深100m以上かつ陸岸から5NMまでの海域で、5^{インチ}吋砲の船体射撃によって沈没させる。

b 火災タンカーが無人の岩場などに着岸して二次被害がほとんど予想されない場合、行方不明の船長を考慮し、船体処分を実施しない。

④ 海自活躍・積極広報

海上自衛隊のグッドイメージを報道してもらうため、「くらま」の向こう側に燃えるタンカーという構図で撮影されたビデオ・写真が、11（日）0700のNHKニュースで放映され、12（月）の新聞朝刊に掲載されるように、艦載ヘリコプター（HS）で佐世保地方総監部へ迅速に空輸する。

⑤ 海保連係・相互理解

佐世保海上保安部警備救難課長が海上保安庁の連絡官として「く

らま」に乗艦してくれるので、緊密な情報交換・連携保持はもとより、海上保安庁と意志疎通を図り、相互理解に努める。

＜例２＞ ロシア海軍３００周年記念観艦式（ウラジオストク）の
派遣部隊指揮官（第２護衛隊群司令）の方針

[平成８．４．中 防衛庁長官のロシア国防大臣訪問

⇒ ８．４．下 『海上自衛隊０８業務計画』に追加される。

派遣部隊は第４３護衛隊（ＤＤ×２）の予定

⇒ ８．５．下 派遣部隊が第２護衛隊群（ＤＤＨ）に変更

→ ８．６．２３佐世保出港～“平成８年度第３回群訓練”

～中途、「本職、くらまを率い大湊經由佐世保へ向かう。第６２

護衛隊司令は以後の群訓練の指揮を執れ。」と令し、旗艦「くらま」のみ津軽海峡で離脱する。

～ ８．７． ８（月）０９４０ i 佐世保にＤＤＨ「くらま」が入
港して派遣準備を開始する。

→ ８．７． ２３（火）０９００ i ２ＥＬ（くらま）佐世保出港

～ ２５（木）０９０１ L ２ＥＬ（くらま）浦塩入港

－ ３０（火）１０２３ L ２ＥＬ（くらま）浦塩出港

～ ８．８． １（木）０８０４ i ２ＥＬ（くらま）佐世保入港]

① 位置づけ

「防衛計画の大綱（７．１１．２８）」のⅢ－４－（３）－イ項に
「安全保障対話・防衛交流を引き続き推進し、我が国の周辺諸国を
含む関係諸国との間の信頼関係の増進を図る。」とあるように、ロシア海軍との信頼醸成措置の手始めとしての防衛交流である。

② 心構え

a ロシア・北朝鮮・中国の過去の歴史と現在の情勢も絡んでくる
ような派遣環境を考慮すると、従来の単純な国際親善という遠洋
航海とは大いに異なることが判明する。

b １９２５年の巡洋艦「磐手」以来の旭日旗を翻し、海上自衛
隊として初めてのウラジオストク訪問であるので、派遣目的を十分
に咀嚼して、超過せず・遺漏なく・不足せず、計画・実行する。

c ロシア海軍との信頼性醸成措置の手始めとしての防衛交流の一
環たる部隊間交流であって、未だ友好親善の段階にまで至っていない

ないことを銘記すべし。

＊浦塩で真水・生糧品・燃料の補給を敢てせず！^{あえ}

- d 海上自衛隊の独自性（文化／伝統／制度）・精強性・平和性（専守防衛／文民統制／志願制／非核三原則／武器輸出三原則）を発揮して、ロシア海軍の軍人及びロシア沿海地方の要人に感銘を与えるごとく行動する。
- e 米国海軍とは同盟関係を貫き、韓国海軍とは所要レベルの国際親善に寄与し、中国海軍とは指揮官レベルの相互理解に留める。
- f 派遣部隊の活躍が日本の新聞・テレビに印象的に掲載・放映されるように、広報計画を十分に練り上げる。
- g 治安情勢悪化・社会情勢不安のウラジオストクから、人も艦も五体満足で佐世保に帰投できるように、乗員・同行者に対する事前教育を含め、十二分の準備を実施する。
- h 海上自衛隊として初めての海域を航行するので、運航安全には万全を期する。
- i 海上自衛隊として初めての海域（鬱陵島西側・日本海西部）^{うつりょうとう}を航行し初めての港湾（ピョートル大帝湾）に入港する機会を有効に活用するため、気象海洋（E S M・B T等）及び港湾地誌等の情報収集に努める。
- j 航海中・停泊中を問わず、秘密保全・工作対策にも万全を期する。

《参考》 『外交フォーラム 一九九八年五月号』

特集；わが友「ロシア」----日露を結ぶころの絆^{きずな}----

絆^{きずな}深めるシーマンシップ——ロシア海軍三〇〇周年記念観艦式——

前第2護衛隊群司令 海将補 牧本信近

私は、第2護衛隊群^{ひき}を率い平成八年六月二三日佐世保を出港し約四〇日にわたる第三回群訓練を指揮していたが、ウラジオストク観艦式に参加するため、途中の津軽海峡で次席指揮官に指揮を^{ゆだ}委ね、旗艦『くらま（ヘリコプター三機搭載の護衛艦）』^{ひき}だけを率いて七月八日佐世保に帰投した。そして、諸々の準備を整えた後、約三五〇名の海上自衛隊員を乗せた『くらま』を率い、八年七月二三日佐世保を出港し、霧の日本海を北上し、七月二六日天然の良港であるウラジオストク金角湾に入港した。

入港歓迎行事が米・日・韓・中の入港順に、その都度岸壁で実施された。その際、私は各国報道関係者を前にして「ロシア海軍プチャーチン中將は一八五〇年代に軍艦四隻を率いて長崎に三度入港しています。その時、十二名の軍楽隊を同行させており、長崎の人達のために西洋音楽を演奏したそうです。私も音楽隊を連れて長崎県佐世保市からやってきました。プチャーチン中將の軍楽隊が長崎の人々を楽しませたように、私の音楽隊の演奏にウラジオストク市民の皆様が楽しんでくれたらと願っています。ロシアはプーシキンの詩を生みチャイコフスキーの音楽を育んだ大国です。その東の玄関たるウラジオストクを、ロシア海軍三百周年記念観艦式のために招かれて、日本国海上自衛隊として初めて訪問できたことは光栄であります。そこで私は、この初めての部隊間交流によって、海上自衛隊とロシア海軍との信頼醸成の向上に寄与したいものと考えています。」とスピーチした。

ロシア海軍太平洋艦隊司令官クロエドフ海軍大將（現在はロシア海軍総司令官・海軍元帥）を表敬訪問した際、「日本海は波が高く航海するのに容易でないと承知しているが、閣下の指揮する『くらま』はその日本海をウラジオストクまで難なく航海してきた。自分は『くらま』が太平洋艦隊司令部庁舎前の岸壁に接岸する様子を見ていたが、実にスムーズな艦付け（後進しつつ艦尾を岸壁に直角にして係留する接岸法）であり艦長の技量の高さに感嘆した。」と、司令官は航海術・操艦術を話題にされ、また「閣下が佐世保へ帰る時、フィリピン沖から北上する台風と遭遇しないことを祈ります。」と、司令官に天候まで気遣って頂いた。このように初対面にも係わらず、海という大自然相手の苦労を理解しあえる者同志の親近感及びN a v yの仲間意識によって、自ずとシーマンシップとフレンドシップの絆を構築できるものである。

行事日程担当のコジェフニコフ海軍大佐（ロシア太平洋艦隊司令部国際法規部長）はいつも充血した目で職務に精励していた。観艦式終了後、私が「大佐、御苦労様。ところで来年は三〇一周年だけど、また外国艦艇を招待しますか？」と尋ねると、コジェフニコフ大佐は「スパシーバ、ガスパージンアドミラル。司令官閣下はそうしたいと考えています。しかし、我々幕僚は、次は四〇〇周年にお招きしたらと、願っています。」と、困憊の中にもユーモアを忘れなかった。これがN a v yなのである。

七月三十日ウラジオストクを出港し、約三五〇名分の思い出とともに晴天の日本海を南下し、八月一日佐世保に帰投した。

4 組織の構成

固有編成に^{とら}囚われず、脅威を評価して任務に適合した部隊区分及び明示した方針を具現できる組織を構成して、役割分担を明示する。

特に、統合任務部隊を編成する場合、自己の派出元自衛隊に^{こしつ}固執せず、陸海空の自衛隊の中から最適機能の最適統合（有機的組合わせ）を選択し、任務最適部隊を構成することが肝要である。

5 綿密な計画

時代の^{すうせい}趨勢を考慮し、報道機関への広報を通じて我が国民と国際社会の支持が得られ、不測事態にも対応でき、権限委任を実行でき、自らの企図が明確に表現され周知されるような計画を、『海上自衛隊作戦要務準則』等に^{じょうちようせい}従い、^{すうせい}冗長性をもたせて策定する。

時代の^{すうせい}趨勢の一つは、本土侵攻という死活的事態でないので、軍事作戦といえども、作戦実施に当たり、**人命尊重**（味方／敵方の人的損害の局限）・**環境保全**（油類による海洋汚染や放射性物質による土壌汚染の防止）・**経費削減**の努力を期待されていることである。

6 知的好奇心と野生的勘

「海は人を磨く道場なり！^{ロマン}浪漫あふれる大自然と^{じか}直に接する緊張感、最新科学技術の粹たる艦船・航空機、一つの文化にまで高められたN a v yの伝統、そして、他人に喜ばれると自分も^{うれ}嬉しい！」が、海上自衛隊に奉職する者の心意気である。そういう海上武人及び同様の陸上武人・航空武人は知的好奇心を旺盛にし、また野生的勘を発展させると^{よろ}宜しい。

（１）知的好奇心の旺盛

知的好奇心とは、「世〔過去・現在・未来〕界〔東西南北上下〕は^などう成っているのか？」という未知の^{ことがら}事柄に対する興味疑問から始まる。知的好奇心を旺盛にする事は、他人・万物・環境に対する想像力を豊かにすること及び外界の価値・真理・危機を感じ取る感受性を高めることへの^{たんしよ}端緒となる。豊潤な想像力と繊細な感受性を有してこそ、二十一世紀の自衛隊に奉職して御役に立てる指揮官・幕僚に大成できる。

ア 想像力

知的好奇心によって“世界を知る”過程において重要な事は、「**自分**

自身でなく自分以外の他人・万物・環境に対する想像力を豊かにすること」である。想像力は‘他人への思い遣り’、‘物事の本質を見抜く洞察力’又は‘E E I（情報主要素）から健全な軍事判決’に通ずる。想像力が低いと、敵が何を考え何を為すか皆目見当が付かないゾ。

イ 感受性

知的好奇心はまた、外界の価値・真理・危機を感じ取る感受性を育て高めてくれる。感受性が低いと、「見れども観えず、聞けども聴けず」の状態に陥って、有識者の講話・著述の全部を感得出来ず、自己の認識する世界を狭くし、連続情勢判断などを狂わしてしまうゾ。

ウ 連続情勢判断

ガイウス・ユリウス・カエサル[BC100－BC44]曰く「人間ならば誰にでも全てが見えるわけではない。多くの人は自分が見たいと欲する事しか見ていない。」と。

『海上自衛隊作戦要務準則』にある連続情勢判断を実施する際、日本人の陥りやすい欠点を提示するので、心に留めておいてほしい。それは、「見たくないものは見えない」「聞きたくないことは聞こえない」「期待してない結果は事実と認めたくない」という事である。つまり、I という原因からO という結果を期待したのに、現実にはX という結果が出たとする。その時、我々は「こんな筈じゃない」として、現実のXを虚構と考^うえて現^そ実を無視しがちである。そして、「こんな筈じゃない」「こんな筈じゃない」と現^{はず}実を無視し続け、我に都合の良い結果のみに期待して、失敗の処理に失敗してしまうのである。これに陥らない方策は唯一つ、我々日本人が失敗の処理に失敗した歴史を研究し、現実を直視する勇氣と現実から出発する智^ち恵とを磨くことである。

人は失敗することがあり、物は故障することがある。古来これが世の習いである。つまり、海の上でも一時的失敗 [＊かかる難局に直面した場合、指揮官は動揺を見せないで図太い態度もまた必要である＊] は避けることができない。しかし、空頼^{から}み作戦でない限り、この一時的失敗で戦闘に敗北することはない。戦闘に敗北するのは、失敗の処理に失敗することである。即ち、失敗の処理に成功すれば傷口が局限され、失敗の処理に失敗すれば傷口が拡大して致命傷になるのである。よって、日常の業務や訓練等における各種の不測事態をあらかじめ予

測しておき、その対応対処計画を綿密に準備し、繰り返し繰り返し演練することである。それでも各種小失敗が生起するので、この小失敗を改善・変革の糧として小失敗を克服し、強い部隊に脱皮させる。こういう積重ねが、更に強い部隊に成長させていくのである。

(2) 野生的勘の発展

アラン・ドロン主演の『怪傑 Z o r o』という映画があった。縦横無尽に活躍する Z o r o とは、カリブ海地方の言葉で「黒い狐の精霊」のことである。狐のような智慧^{ちえ}を持って、戦闘空間／任務環境を自分の庭とし、開発した新しい戦術を次から次へと繰り出して、敵を翻弄^{ほんろう}すべきである。

戦場において、指揮官は人間の野生部分を發揮して全身全霊で感じなければならない。幕僚は考え、指揮官は感じるのだ。これまで工夫・アイデア・改善といった小さな現場学習を積重ねることによって^{つちか}培われ体得した知識・見識・胆識が、潜在意識下で融合・相関され、戦闘空間／任務環境の刺激によって顕在化し、指揮官の必要とする何かとして、感じ取ることが出来るのだ。これを野生的勘（動物的勘）といい、帝国海軍の言う一瞥^{いちべつ}判断力及び米国海軍の言う意思決定理論の直観的アプローチ（⇔意思決定理論の分析的アプローチ）に通ずる。

よって、有事といえど平素やってることしか出来ないのだから、自分の部隊をよく知り関係令達類や守則・標語などを勉強し戦史を研究する‘学’の段階から始め、指揮能力向上を任務遂行上の必須要件ととらえ C⁴I S R を通じて指揮能力の範囲を拡大する‘術’の段階へと進み、野生的勘（動物的勘）を涵養^{かんよう}し発展させて戦争に征^{いく}つて任務を完遂し生きて帰れる‘芸’の段階へと精進すべし。

7 大胆な実行

- (1) 厳しいストレスの中で苦痛を忍ぶ勇氣と環境条件に流されない気概により、必要とあらば既定^{きてい}のドクトリンですら敢^{あえ}て修正することも辞さないという確固とした意志でもって、最適と確信する計画を実行して、指揮官自身が Force-Multiplier（戦力増殖者）となるべし。但し、人間の脳は自分に都合のよい情報を拾^{ひろ}って話を組み立てる性質があるうえに、思い込みというユラギを抱^{かか}え込んでいることに注意しなければならない。

- (2) 情報活動は海上に出してから初めて開始するのではなく、周到かつ綿密に停泊中／駐機中から開始しておくべきである。
- (3) ありとあらゆる組織体系制度（システム）には、必ずや、その存在を左右する不可欠の重心がある。重心が傷つけば、システムは機能不全に陥ってしまうものである。上辺の重要度に囚われず、「何が重心か」をよく見極めて、それを精密攻撃することが、最も効果的である。
- (4) C⁴I S Rを活用して指揮に係る時間・空間問題を克服し、全般作戦状況図（C O P = Common Operational Picture）を活用して作戦速度（Op-Tempo）で敵を上回るのだ。
- (5) 軍事作戦にストレスと疲労はつきものであるもので、人間と機械が回復力を失ってしまう限度をよく見極めておき、休暇と整備を適切に作為する必要がある。特に、指揮官は、どんな時でも寛容と共感を交えたユーモアを忘れず、また定期的に十分な休養と熟考の時を作為し、精神的にも肉体的にも健康を維持する義務がある。

8 周密な報告

報告・通報して、初めて当該事象は存在したことになる。よって、重要事象発生終了時または定期のS I T R E P〔下級指揮官から上級指揮官への報告〕及び上級司令部の日例会報や作戦会議での発表に間に合うS I T R E P S U P P L E M E N T〔下級司令部作戦幕僚N3から上級司令部作戦幕僚N3への詳細報告〕によって、時宜を得た報告を為すべし。

その際、国際法や諸法令に基づく我が行動の正当性と相手の不法性とを立証するため、証拠となる記録・ビデオ・写真など及びリーガルアドバイザー（legal adviser）を活用する着意を持つとともに、その正当性を主張できる腹案を準備しておくことを忘れてはならない。

9 教訓の抽出

部隊運用は科学であるとともに用兵術（operational art）としての性格を持っている。自他の経験から虚心坦懐に学び取った教訓を適用し、作戦分析手法（モデル&シミュレーションなど）も活用しながら、我が部隊運用の改善を、“情勢判断～計画策定～行動対処～実施監督～教訓改善”フィードバックループ連鎖の循環として、迅速確実に実施していくことが重要である。

10 知行合一

明の大儒王陽明〔1472－1528〕の説く“陽明学”は、「真の知識は必ず

実行を伴う」^{ちこうごういつ}として、知行合一を重視する。

通常は‘知ってる事と出来る事とは違う’のであるが、知ってる事と出来る事とを同一にしないと、御役^{おやく}に立てない。何事を為す^なにしても、まず意識しなくてはならないが、そこに止まる^{とど}べきではない。もう一歩進めて、意識したという事も捨^すてて行かなければならない。意識して遣^やってるうちは、まだ本物ではない。そこで、鍛錬や勉強を専心集中継続すると、意識せぬ時、注意を向けていない時に、意識そのものが働いてくる。自分の心でないと思うものが、自分の自覚以外のところで働いていて、それがどうかして自分の心の中に現れてくるのである。つまり必要な際は、体が自然に動いてくれ、頭の中に自然に判決が浮かぶ。こうなったら知ってる事と出来る事とが同一になって、もう本物であり、国家の御役^{おやく}に立つことが出来るのである。本物の達人たるべく、精進^{しょうじん}あるべし。

第 8 節 インド洋方面派遣部隊視察

私のインド洋方面出張〔16. 3. 9（火）～17（水）〕の目的は三つあった。第一はインド洋方面派遣海上支援部隊隊員と派遣海上輸送部隊隊員を激励することであり、第二は「政府の基本計画」「防衛庁の実施要項」「防衛庁長官の般命」「海上幕僚長の指示」を受けた「インド洋方面派遣部隊指揮官（自衛艦隊司令官）の実施計画」に是正余地がないか、現地を自ら観^みて現場の派遣海上支援部隊・派遣海上輸送部隊の隊員の声^{こゑ}を直に聴くことであり、第三はインド洋方面派遣部隊が御世話になっている現地の方々に御礼^{ごんじょう}を言上することである。

1 派遣海上支援部隊隊員と派遣海上輸送部隊隊員を激励

インド洋方面派遣部隊視察に際し、訓示

「何の為に戦う／働くのか？」その大義が明示されると、武人の精神は安定し武人の戦意は高揚する。インド洋方面派遣部隊には、国益を護持^{たも}する為という明確な大義が有る。

我が国〔エネルギー自給率20％・食糧自給率40％〕は、世界中から資源を輸入し高い技術力で付加価値^{ほどこ}を施し世界中に製品を輸出する貿易立国〔全貿易量の99％以上が海上交通〕・技術立国であるので、世界が平和で安定していること及び日本が世界から好^よい評価と高い信頼を得ることが、我が国の基本的国益である。よって、我が国が、サミット構成国／経済大国／

技術大国として、国際的責務“世界の平和安定の^{ため}の努力”を果^はたす事によって、日本の生存・安全保障・繁栄を実現出来るのである。

「インド洋方面派遣部隊＝派遣海上進出部隊＋派遣海上支援部隊＋派遣海上帰投部隊＋派遣海上輸送部隊」の諸官は、“世界の平和・安定～日本の生存・安全保障・繁栄～海上自衛隊の任務”という目標系列の中に在^ある。しかも、日本〔原油の中東依存度86%〕の生命線であるペルシャ湾から日本に至る石油海上交通路の安定化も進出帰投時に実践^{じっせん}しているのだ。

海洋は前例踏襲^{とうしゅう}・問題先送^{さきおく}りを許さないリアリズムの支配する世界である。千変万化する海洋を活動の場とする我々は、現実を直視して明確に理解し的確な対案を準備するリアリズム及び変化を受容し変化に適応するフレキシビリティを必要とする。〔リアリズムとフレキシビリティを失^うしなうと「潮気が抜けた」と言われるぞ！〕また、海洋は、断絶の壁でなく、人と人との繋^{つな}がり（交流・対話・交易）の場である。海に生きる我々は「力を合わせなければ千変万化の海で生き続ける事が出来ない」と経験から知っている。生命共同体・一蓮托生^{いちれんたくしょう}・板子一枚下地獄^{いたごした}の艦^{ふね}に在^あっては、他者が生きてこそ自己も生きられるのだ。

だから、海上自衛隊には、他人の嫌がる事は自分が進んで引き受けるという意気があり、自分がそうしなければ為^ならないと考え自分でどうするか工夫し自分で遣^やるという情熱がある。そして、「海は男を磨く道場なり！浪漫あふれる大自然と直に接する緊張感、最新科学技術の粹たる艦船・航空機、一つの文化にまで高められたN a v yの伝統、そして、他人に喜ばれると自分も嬉しい！」が、海上自衛隊に奉職する者の心意気である。

インド洋方面派遣海上支援部隊・派遣海上輸送部隊の諸官は、各国海軍部隊の仲間を間近^みに視て共に働くことによって「N a v yとは普遍^{ふへん}性を有する文明であり世界中にその仲間が居る」ことを実感し、2001年9月11日以降のコアリションフォース海軍の雰囲気^{ふんいき}を肌で感じ取っていることと思う。

諸官の実施している海上支援活動・海上輸送活動は、国家の意思を、国民を代表して、実際の行動を持って、国際社会に示しているものである。

実任務目白押しの時代における自衛艦隊は、人物金の不足や各種法令の制約のなか、誇りと苦しさとを同時に味わっている。毎回毎회가正論・正義・倫理であれば宜^{よろ}しいけれど、それだけでは仕事に成^ならないのが自衛艦隊であ

る。不合理な事にでも、無理して瘦我慢^{やせがまん}しているのが現状だ。そういう場合、
つい我々だけが古今東西に苦しんでいると思いがちであるが、縦軸と横軸を
見渡すと、責任が軽くなる訳ではないが、少しは気が楽になる。即ち、縦軸
の歴史を見ると斯^こういう事はよく在^ある事だし、横軸の他国を見ると海軍将兵
は似たような悩み^{なや}を抱^{かか}えている。紀元前213年第二次ポエニ戦役でカルタ
ゴの名将ハンニバルが「多くの事はそれ自体では不可能事に見える。だが、
視点を変えるだけで可能事に成り得るのだ。」と語っている。つまり視点を
変えたと、歴史とは通常読む物であるが、今の自衛艦隊は、歴史の現場に立
ち会い歴史の現場で働き、正に歴史を造りつつ在る。何と胸おどる事か！
How to be でなく How to do の世界に生きる我々は、階級と職責に関係なく
相互の人格を尊重して自由に発言出来るN a v y の文化を維持し、戦闘空間
の情勢認識と指揮官の意思決定に係る状況認識との共有による自己同期<sup>セルフシンクロナイ
ゼーション</sup>によって、複雑系世界の変化に対しフィードバックループを有する適応
によって天空海闊^{てんくうかいかつ}に仕事をしよう。そして、Quality Of Life（予定の立つ上
質^{あか}の生活）も追求して、心明^{のぞみ}ルク望清ク！

平成十六年三月十二日

インド洋方面派遣部隊指揮官

（自衛艦隊司令官）

海将 牧本信近

2 インド洋方面派遣実施計画

（1）背景

ソルティドッグ^{ソルティドッグ}老練水兵が「冷戦が終わって、兵力は削減されたが、仕事は増えたよ。
その上、海の広さは昔からちっとも変わっていないんだ。」と呟^{つぶや}いた。

ア 山本七平〔1921－1991：評論家〕いわく「近代日本が勝利した戦争の
期間は日清戦争8ヶ月・日露戦争16ヶ月・満州事变5ヶ月であった。
政府から説明されて納得し覚悟した帝国臣民といえど、日本人は精々^{せいせい}二
年ぐらいしか戦争という緊張には耐えられない国民性を持っている。そ
の二年を過ぎると、厭戦気分^{えんせん}～退廃事象^{たいはい}が待っている。」と。

インド洋方面派遣海上支援作戦（初年に計二名の病死と交通事故死）
は三年目に入っている。本作戦は10年も続くものと思料する。

よって、“①業務過多～②休養漸減^{ぜんげん}～③多忙疲労～④生物本能による

利己主義に傾斜する～⑤指揮官に余裕なく眼が三角となる～⑥悪雰囲気
が部下に伝染する～⑦人間関係ギスギス～⑧ミス・嫌がらせ／上司こ
まらせ・ウツ～⑨事故多発～①”という悪循環に陥らない部隊レベル方
策は「^か斯かる時こそ上級指揮官は、胆識が^{ため}試される男の修行と心得て、
心に喜神を含んで、N a v y の要件たる指揮官の^{てんくうかいかつ}天空海闊及び部下の
Quality Of Life を追求すること」である。

イ 従来は実任務を遂行するのに、高練度部隊として万全を期すため、時
間をかけた十分な事前準備で臨^{のぞ}んだものだ。しかし、現在は実任務を遂
行するのに、中練度部隊といえども、時間をかけた十分な事前準備で臨
む余裕も余力もない。練度向上訓練を^や遣りながら実任務海域へ進出し、
練度維持訓練を^や遣りながら実任務を遂行する。つまり、訓練を^や遣りなが
ら任務を遂行し、任務を遂行しながら訓練を^や遣るので、今や実任務と現
地訓練とは、表裏一体の関係にあるのだ。

(2) 現 地

ア 警備上・安全上の観点から現寄港地を適当と認める。

イ その他

略

(3) 現 場

ア “どの艦^{ふね}で誰が何時^{いつ}出国し何時^{いつ}帰国するか半年前に判明する”という
体系的な展開計画・修理計画・人事計画がベストである。しかし、私の
責任でありながら、残念ながらそうならない！

それは、……………。

イ その他

略

3 現地要人に御礼言上

アッサラームアレイコム！

私は Vice Admiral **MAKIMOTO**, Commander In Chief, Self-Defense
Fleet です。

〇〇〇国防省を訪問できましたことは、私の深く喜びとするところであり
ます。

日本国は貿易立国・技術立国でありますので、世界が平和で安定している
こと及び我が国が他国から高い信頼を得ること、この二つが我が国の基本的

国益であります。よって、サミット構成国の国際的責務“世界の平和安定の為の努力”を果たす一環として、日本国政府は海上支援部隊と海上輸送部隊をアラビア海・アラビア湾に派遣しました。

〇〇〇国の方々は寛容（タサームフ）で親切（カリーム）との評判が遠く日本まで鳴り響いています。

2001年11月から現在まで、日本はアラビア海に艦艇延べ約40隻・乗員延べ約7000名を派遣しています。我が部隊が御世話になっている貴国の要人に御礼の挨拶を言上するため、私は日本から来ました。本当に有り難う御座います。

我が部隊は、艦艇の補給と乗員の休養のため、貴国に入港させて頂いています。上陸した乗員は、アラブの心に触れ、アラブの歴史文化を学ぶ機会が在りました。例えば、英雄サラハディーンの物語は日本人の心をも揺り動かすのです。

第9節 定期昇任者に対し訓示

昇任おめでとう。

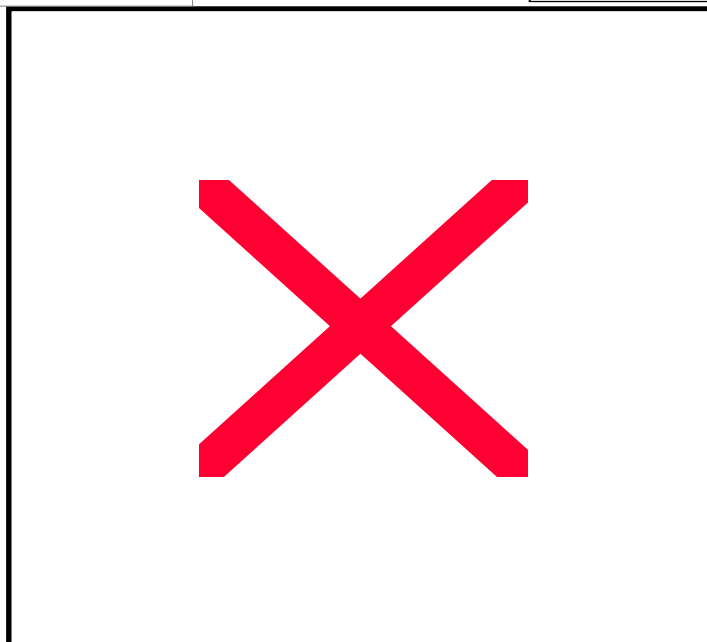
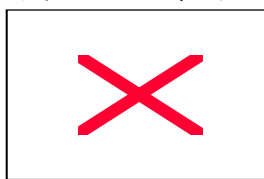
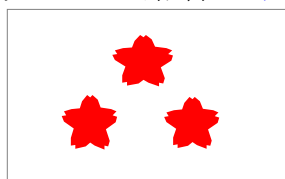
緑輝く日本の盛夏を迎え、諸官とともに、我が国の^{いやさか}弥栄と^{おのおの}各々の昇任を^{ことほ}言祝い、統率方針「^{てんくうかいかつ}天空海闊」・勤務方針「精強、自衛艦隊」・指導方針「強い指揮官とタフな隊員」をもって、改めて使命を^{まっとう}全うする決意を新たにしたい。

さて、2000年の東奥日報の朝刊記事によると、フランスの小説家・飛行士アントワーヌ・ド・サンテグジュペリ Antoine de Saint-EXUPERY[1900 リヨン市生れ－1944 出撃行方不明]は、童話『星の王子さま』で、「心で見なくちゃ、物事はよく見えない」と謎を掛けている。では、物事を心で見るとはどんなことなのか？ 理論物理学者の佐治晴夫宮城大学教授がそれを解いている。

即ち、「……^{わか}心で見るとは、^{すば}目に見えないものを理解しようということです。例えば、真昼の星、普段は地上から肉眼で見えませんが、真昼でも星は実在し、上空に行けば肉眼で見えます。そこで、見えないから存在を信じない、触れられないから存在を気に留めない、聞こえないから存在を無視するという態度は、理解しよう・^{そば}判ろうという気持ちがない証拠であり、^{すどお}どんなに素晴らしい出来事や物事であっても、その人の側を素通りしてしまいます。五感だけに頼っては、物事の^{せま}真実に迫れません。見えないものに対しては、謙虚な心で、視点を変えながら理解しようと^{つと}努めなければなりません。謙虚な心は、他人を受入れ

る寛容な心を^{はぐく}育み、他人に幸せになってほしいと願う優しい心を導きます。謙虚さ・寛容さ・優しさは、見えないものを見えるようにする力を授けてくれます。137億年前の宇〔天地四方：空間〕宙〔古往今来：時間〕誕生で^{つく}創られた素粒子（クォーク・電子・ニュートリノ・光子等）から成る原子の^{りんねてんしょう}輪廻転生によって造られている我々人間（60兆個の細胞）も宇宙の一部です。人間は、宇宙の一部である“^{ひとかけら}一欠片の^{いのち}生命”つまり“宇宙の^{ひとかけら}一欠片”と意識する時、謙虚になり、物事を心で見えることを促します。……」と。

昇任を契機^{けいき}として諸官が^み物事を心で観るように要望して、私の訓示とする。



自衛艦隊司令官

海将 牧本信近



お わ り に

「井上^{やすし}靖著『孔子』新潮文庫 1995 年」によると、孔子^{こうし}〔姓は孔・名は丘・字は仲尼^{あざな}：BC 551－BC 479〕の門弟^{えんきよう}蔣^{えんきよう}蘧^{えんきよう}が孔子^{こうし}について次のように述べている。「子は 50 歳の時、この紊^{みだ}れに紊^{みだ}れた世の中を、自分の周辺から少しずつでも良くして行こうという御^{おかんが}考えを、はっきりと天から与えられた使命として自覚され、改めてそれを御^{ごじぶん}自分に課せられたかと思ひます。誰から頼まれたのでも命じられたのでもない。自分が生^{せい}を享^うけて、この世で為^なすことはこれしかない^{おかんが}と御^{おかんが}考えになったのでありましよう。併し、天^{あめ}から与えられた仕事であるからといって、必ずしもそれを天が守って下さるとは御^{おかんが}考えにはならなかったと思ひます。いつ思わぬ障害が起ころうかも知れないし、いつ中道^{ちゅうどう}で斃^{たお}れるかも知れぬ。大きい自然^{せつり}の摂理^{せつり}の中で生きている小さい人間のすることである。思いがけぬ障害が、思いがけぬ時にやって来ても、一向^{いっこう}に不思議はない。だからと言って、己^{おのれ}が天から与えられている使命^{いささ}に対して、些^{いささ}かも努力を惜しんではいけない。そういう小さい人間の小さい努力が次々に重なって、初めて人間にとって^{しあわ}倖^{しあわ}せな平和な時代が来るといふものである。子はこう御^{おかんが}考えになっていたと思ひます。天命を知るということは、こういうことをございまいましようか。御^{ごじぶん}自分の御^{おしごと}仕事を天から受けた大きい使命だと御^{おさと}悟りになったことが一つ、それと同時に、その仕事^{しごと}が天の弛^{ゆる}みない自然の運行の中に置かれる以上、全^{すべ}てが順調に運ばれてゆくということを期待することは出来ず、思いがけない時に、思いがけない困難に、色々な形で曝^{さら}されることもあるであらうということをし、確^{しか}りと御^{おさと}悟りになったことが一つ、この二つを併^{あわ}せて、このことが天命を知るということになるのでございまいましようか。如何に正しい立派なことをしておりましても、明日^{あす}の生命^{いのち}の保証すらありません。如何なる思いがけない苦難^{いくなん}が立ち塞^{ふさ}がって来るかも知れませぬ。吉兆禍福^{きつちようかふく}の到来は、正しいことをしようとしまいと、そうしたことは無関係のようでございまいまします。大きい天の摂理^{せつり}の中に自分を投げ込み、成敗^{せいばい}は天に任せ、その中で己^{おのれ}が信じた道を歩く！見事なことでございまいまします。子以外^しに何方^{どなた}がこのように醒めた御^さ覚悟^{おかくご}を持てたでしやう。」と。

孔子^{こうし}に及ばぬにしても、国家の命令で艦長・指揮官^なに為^なった諸官は、醒めた覚悟^さを持って精進^{しょうじん}し、指揮官道^{しこうくわんみち}を全^{まっ}うする義務^{ぎむ}が有る。

強い艦長・指揮官たる諸官の武運長久を祈る。